

日本緑化工学会 コミュニティレター

Community Letter of the Japanese Society of Revegetation Technology

第2号 2025年4月30日 発行



目次

日本緑化工学会の日本農学会への加盟について 高橋輝昌……………2	
「第56回日本緑化工学会大会」案内（第2報）……………4	
「日本緑化工学会学会賞」受賞候補者の推薦について……………13	
「乾燥地緑化研究部会 公開シンポジウム 2025」案内……………19	
研究ノート：なぜ生物多様性を市民科学で扱うのか？ 倉本 宣……………22	
：緑化の居酒屋談話 侵食防止には植被率でしょの巻 田中 淳……………24	
：現地検討会『能登半島地震による影響と自然再生』（I）実施報告 中村華子……………27	
緑地探訪：柏崎松波海岸の人工砂丘 今富有紀……………27	
：都市緑地と生物多様性 梶川昭則……………30	
新会員の自慢：緑豊かな武甲山を夢見て 小澤信彦……………31	
書 評：ウォークアブルなまちを評価する……………33	
第18期第8回理事会議事録…34 会員の異動…38 賛助会員名簿…39	



写真：明治大学黒川農場自然生態園と周囲の雑木林で、学生が案内の準備をしている様子
生きものに詳しい学生も詳しくない学生もいます。子どもたちとうまくやりとりできる学生もできない学生もいます。多様な学生たちがそれぞれ自分なりに力を発揮することで、私たちの活動は成り立ってきました。発揮した力を生かして就職できる学生はまだまだ少ないのが実情です。20 年先、30 年先にこうした経験を思い出して、市民科学にかかわってくれることを願っています。（倉本宣、P22-23 の研究ノート参照）

日本緑化工学会の日本農学会への加盟について

会長 高橋輝昌

2025年2月8日の日本農学会総会において、日本緑化工学会(以下、本会)の加盟について審議が行われ、全会一致で承認されました。本稿では、本会が日本農学会に加盟した経緯を紹介します。

日本農学会には農学、林学、水産学、獣医学等のもとより、広く生物生産、生物環境、バイオテクノロジー等にかかわる54団体(日本緑化学会を含む)が加盟しています。日本農学会は1930(昭和5)年から活動が続けている歴史ある団体で、大会やシンポジウムの開催、農学振興に関する調査研究及び各種提言、業績の表彰及び研究の奨励といった社会的にも影響が大きな活動を行っています。特に日本農学賞の受賞者が読売農学賞に推薦され受賞者となり、大きく報道されているので、ご存じの方も多いことでしょう。

本会は財政状況を改善するために17期に学会誌を電子化する方針を決定しました。その後、実施時期が当初の予定よりも遅れたものの、50巻1号(2024年8月刊行)からJ-Stageのみでの公開になりました。これにより、学会誌刊行費が大幅に縮減され、また、それ以外の会務についても各担当役員の尽力があり、本会の財政状況は改善されています。

この財政状況の改善をうけ、これまで「組織の維持」のために多くを費やしてきた予算や労力を本会の主目的である「研究の推進」や「技術の向上発展」により多く振り向けられるようになりました。本会の学術活動としては、研究部会の活動のほか、大会・シンポジウム・見学会の開催、学会賞の選考・授与などがあります。また、研究奨励金制度を設けることも検討されています。これらは本会の目的達成に向けた本会内部の活動あるいは本会の活動成果を外部に発信する活動といえます。

私は、本会の学術活動を推進する上で「外部との連携」や「外部からの評価」の活用も有効であると考えました。日本農学会において本会の活動を紹介(存在を主張)し、本会活動に対する評価を得ることは、本会の学術活動活性化のきっかけとなります。このことから、本会の日本農学会への加盟を理事会の議を経て昨年の総会に諮りご承認いただきました。

昨年11月に日本農学会に提出した入会申込書の入会理由欄には「日本農学会の一員として活動することにより、日本緑化工学会の活動成果を広めるとともに、農学の発展と普及に寄与するため。日本農学賞受賞者を輩出することを学会の目標のひとつに加えることで研究活動の活性化を図るため。」と書かせていただきました。これまでの日本農学賞受賞者(日本農学会ホームページ参照)は錚々たる顔ぶれです。しかし、日本緑化工学会から受賞者を輩出することは決して無理な目標ではありません。

本年の日本農学会大会(4月5日開催)で配付された「日本農学賞受賞論文要旨」には加盟学協会の情報として、昨年の日本緑化工学会賞受賞者名・業績名なども掲載されています。今後、本会に対する認知度も高まっていくことでしょう。

このたび加わった「日本農学賞受賞者の輩出」という新たな目標に向かって、本会会員がより一層学術活動に力を注がれることに期待します。

新技術で社会に貢献
次世代の地球環境保全へ向けて展開

コンサルティング事業

斜面防災／治山・林道／河川・砂防・海岸
地盤環境／環境・緑化

インフラ整備・メンテナンス

地すべり防止工事／斜面・のり面工事
インフラメンテナンス

研究開発

InSAR／BIM・CIM
シミュレーション技術／空間情報技術

ISO 9001 登録



国土防災技術株式会社

URL:<https://www.jce.co.jp/>

本社：〒105-0001 東京都港区虎ノ門3丁目18番5号 TEL: 03-3436-3673(代) FAX: 03-3432-3787

「第 56 回日本緑化工学会大会」案内（第 2 報）

第 56 回日本緑化工学会大会運営委員長 今西 純一

第 56 回日本緑化工学会大会を下記のとおり開催いたします。多数の皆様のご参加をお待ちしています。本大会の大会参加，シンポジウム，現地見学会等の行事は森林・自然環境技術者教育会（JAFEE）の CPD ポイント（森林分野 CPD）として申請することができます。森林分野 CPD は建設系 CPD 協議会と連携しています。

1. 大会概要

(1) 日程：2025 年（令和 7 年）9 月 8 日（月）～10 日（水）

1 日目 2025 年 9 月 8 日（月）

午前～午後	大会受付開始 開会挨拶，口頭発表，研究集会 ポスター発表（論文，技術報告，研究交流発表），資材・工法展示 理事会，総会，学会賞授賞式，シンポジウム
18 時～20 時	情報交換会

2 日目 2025 年 9 月 9 日（火）

午前～15 時 45 分	口頭発表，研究集会 ポスター発表（論文，技術報告，研究交流発表），資材・工法展示 評議員会，ポスター賞授賞式
--------------	--

3 日目 2025 年 9 月 10 日（水）

午前	現地見学会（大阪・関西万博会場）
午後	各自で自由見学

(2) 会場

1 日目 京都大学芝蘭会館・別館（京都市左京区吉田近衛町・吉田牛ノ宮町）

京都大学生協生活協同組合吉田食堂（京都市左京区吉田本町）（仮※）

※ 情報交換会の会場は未定です。

2 日目 京都大学芝蘭会館・別館（京都市左京区吉田近衛町・吉田牛ノ宮町）

3 日目 大阪・関西万博会場（大阪市此花区夢洲）

2. 参加費

当日受付と前納受付があります。前納の場合，大会参加，情報交換会には割引があります。会員の皆様にはできる限り前納受付をお願いいたします。なお，現地見学会については，前納のみとし，空きがある場合のみ当日受付を行います。

		会員		非会員		
		正会員	学生会員	一般	大学院生 学部生	高校生
大会参加	当日	7,000 円	2,000 円	8,000 円	3,000 円	無料
	前納	6,000 円	1,500 円	8,000 円	3,000 円	—
情報交換会	当日	6,000 円	3,000 円	7,000 円	3,500 円	—
	前納	5,000 円	2,000 円	7,000 円	3,500 円	—
現地見学会 (要事前申込)	前納	7,000 円	6,500 円	7,500 円	7,000 円	資料代 無料
現地見学会・定員に 空きがある場合のみ (但し、大阪・関西万 博入場チケットを各 自別途購入のこと)	当日	資料代 500 円	資料代 無料	資料代 1,000 円	資料代 500 円	(入場チケ ットを各自 別途購入。 17 歳以下は 「中人」チ ケット)

- ※ 賛助会員の方は正会員と同等の条件でお申し込みいただけます。
- ※ 現地見学会は定員（40 名を予定）になり次第締切ります。
- ※ 論文部門、技術報告部門の発表内容は大会特集号（日本緑化工学会誌第 51 巻 1 号・大会特集号）に発表内容が掲載されます。大会開催前からダウンロードは可能ですので、会員の皆様はできるだけあらかじめ各自必要データを用意してお持ちください。
- ※ 現地見学では、事前申し込み、入金の方に対しては、大阪・関西万国博覧会の一般団体割引で対応いたします。
- ※ 現地見学会で当日参加希望の方は、空きのある場合のみ受け入れます。ただし、当日の入場チケットの購入は各自でお願いします。

3. 参加申込方法

(1) 前納申込

参加者は、大会ウェブサイトの「日本緑化工学会大会参加申込フォーム（Google フォーム）」に必要事項を記入・送信してください。大会参加申込フォームの送信（受理）と参加費の前納振り込み確認をもって本大会の前納申込が完了します。

(2) 当日受付

大会当日の参加費等の支払いにはお釣りのないようにご協力ください。

(3) 申込締切

研究集会申込	2025 年 7 月 4 日（金）
研究交流発表申込	2025 年 7 月 25 日（金）
前納申込	2025 年 7 月 25 日（金）
前納割引の振込	2025 年 8 月 1 日（金）

- ※ 大会参加申込フォームの送信（受理）と前納割引の参加費振込の両方が上記締切までに完了している場合に、前納割引が適用されます。締切の翌日以降の申込、振込については当日料金の適用となりますので、不足額を請求いたします。

(4) 参加費等の払込先

下記の大会用の口座にお振り込みください。

(郵便振替) 00110-4-750454 日本緑化工学会大会事務局

銀行名：ゆうちょ銀行 金融機関コード：9900

店番：019 店名：〇一九（ゼロイチキユウ） 預金種目：当座

口座番号：0750454 加入者名：日本緑化工学会大会事務局

(5) 振込方法についてのお願い

前納は、原則的に個人でお願いします。法人・団体名でお申し込みの方は、会員氏名の後、1字空白+会社名（株式会社等を除き）を、記入可能な限り入力してください。非会員の方（前納割引はございません）は、氏名の後、1字空白+「ハイ」^①と記入願います。

法人会員など複数名同時に振り込まれる場合は、振込人名義には、会社名（株式会社等を除き）と人数を必ず記入（例：ヒガシホコウツカ^② 5）し、振込内訳を必ずメールで送信してください。振込内訳については、参加内容を記載したリスト（大会参加・情報交換会・現地見学会に「○」を付し、振込金額、氏名、ふりがなは、全員分、会社等名、〒、所在地、アドレス、電話は代表者のみ必須とし、他者は任意とします）を Microsoft Excel で作成、送付をお願いいたします。

なお、一旦納入された大会参加費・情報交換会費等は返金いたしません。

(6) 領収証の発行について

領収証は入金確認後にメールで送付いたします。振込のタイミングによっては領収証の発行まで1、2週間かかることがあることをご承知おきください。また、9月1日以降の入金分については大会当日に領収証を発行いたします。

インボイス制度に対応した領収証の発行はいたしません。

4. 企業展示（資材・工法展示）

(1) 企業展示募集のご案内

緑化用資材、緑化方法、分析・調査器具および図書等、緑化に関する技術及び商品の展示会を開催いたします。多くの皆様のご出展をお待ちしています。運営委員会（担当：貫名）にて受付致しますので、メールでお申し込み、お問い合わせください。

【展示費用】賛助会員 10,000 円／一般団体 20,000 円

（展示できる団体数に限りがありますのでご了承ください）

【申込先：運営委員会】 ryokkako.taikai.56★gmail.com

※メールアドレスの★は@に置き換えてください。

(2) 展示スペースについて

展示場所は2階の稲盛ホール前を予定しており、長机1台、イス2脚、電源コンセントを使用することができます。

5. 研究集会

緑化に関わる研究集会の開催を募集いたします。最大で 6 集会を予定しています。開催日時等については、大会運営委員会で調整するため、ご希望に添えない場合もあります。当日の運営は代表者にゆだねられます。

【記載内容】

集会テーマ（タイトル）

概要（200 字程度）

参加予定人数

開催希望日時

代表者氏名・所属 連絡先（電話番号，メールアドレス）

【提出締切】 2025 年 7 月 4 日（金）

【申込先】 代表者は必要事項を大会参加申込の Google フォームに入力してください。

6. シンポジウム

「緑化の未来を拓く！森林・草地生態系における植物群集形成の科学」

2025 年 9 月 8 日（月）午後

生物多様性保全への意識の高まりとともに、緑化においても生物多様性への配慮がより一層求められるようになっていきます。これまでに地域をモデルにして樹林や草地の形成が行われた事例はありましたが、今後はそのような事例が増えて行くことが予想されます。様々な緑化の手法が開発され、取り扱い実績のある植物の数も増えてきている中で、緑化によって形成可能な植物群集も多様になり、地域の自然をモデルにした緑化も実現しやすくなりつつあります。しかし一方で、目標とする植物群集を確実に形成できるという段階にはまだ至っておらず、実現には様々な課題を抱えています。本シンポジウムでは、森林生態学や草地生態学の分野で活躍する研究者を迎え、地域の自然をモデルにした緑化における目標設定、緑化や植生管理のあり方、実践事例についてご講演をいただいた後、討論を行います。植物群集形成の科学という視点から、緑化の未来を見据える機会にしたいと思えます。

司会・趣旨説明	今西純一（京都大学）
講演 森林生態系の視点から	石井弘明（神戸大学）
講演 草地生態系の視点から	山田 晋（東京農業大学）
講演 実践事例とその課題	橋本佳延（兵庫県立人と自然の博物館）
討論	

7. 現地見学会

「大阪・関西万博における未来の緑の活用と管理」

2025 年 9 月 10 日（水）

(1) 概要

2025 年日本国際博覧会（大阪・関西万博）が大阪の夢洲で開催されます。現在、大阪では、JR 大阪駅、阪急・阪神・大阪メトロ梅田駅など交通の中心部でもある場所において、グラングリーン大阪やグランフロント大阪といった経済活動の大きな場を初め、緑豊かな空間づくりが産官学によって実装されてきています。また、大阪府内でも府営公園や市営公園の緑化の取り組みを初め、グリーンインフラの実装による緑の都市空間が作られてきています。

そのような中で今回開催される大阪・関西万博のコンセプトは「People's Living Lab 未来社会の実験場」です。「緑」にも着目されており、会場の様々な場において緑の利活用が推し進められています。本大会の現地見学会では「大阪・関西万博における未来の緑の活用と管理」をテーマに、これから先の未来の緑のあり方、利活用の仕方について見て学びます。加えて、夢洲という海上会場といった環境での緑の管理について見ていただこうと考えております。現地では、大阪・関西万博の管理運営を進めてきた公益社団法人 2025 年日本国際博覧会協会の担当者、また施工管理をしている企業の担当者から、それぞれ説明していただくことになっています。

未来に向けた大阪・関西万博の「みどり」を実際に会場で見えて感じましょう。

(2) 実施日時

2025 年 9 月 10 日（水）午前 現地見学会 午後 各自で自由見学

8:50（仮） 大阪・関西万博東エントランス集合

9:05～11:20（仮） 見学並びに説明

静けさの森：公社）2025 年日本国際博覧会協会 施設維持管理局

森になる建築：（株）竹中工務店

大屋根リング上部植栽：大和リース（株）

その他植栽に関しての見学：（株）日建設計

11:30～（仮） 大阪・関西万博会場の自由見学、自由解散

※見学時間は未定です。万博会場の状況等により時間を変更する可能性がありますので、ご承知おきください。

(3) 募集人数

先着 40 名

(4) 参加費用

参加費は前項「2. 参加費」に記載の通りです。

自分で入場チケット（通期パスや早期購入割引チケットなど）を手配する正会員、非会員（一般・学生）の参加者は大会参加費等とあわせて見学会参加費（資料代）（正会員 500 円、非会員（一般）1,000 円、非会員（学生）500 円）の払い込みをお願いします。

当日受付：事前申込者の上限数を超えない場合、当日の参加受付は可能ですが、当日の大

阪・関西万博入場チケットは別途各自で購入してください。参加費（資料代）は前項「2. 参加費」に記載の通りです。

(5) 申込方法

【申込締切】2025年7月25日（金） 【振込期日】2025年8月1日（金）

【申込先】大会への参加と一緒に大会参加申込の Google フォームからお申し込みください。お申し込みください。現地見学会の参加人数には定員がありますので、運営委員会からの受付返信を待って参加費をお振り込み下さるようお願いいたします。現地見学会は定員になり次第、締め切りますので、早めにお申し込みください。

(6) 現地見学会に関する問い合わせ

不明な点については、運営委員会・見学担当者へご連絡ください。

【問い合わせ先：運営委員会】 ryokkako.taikai.56★gmail.com

※メールアドレスの★は@に置き換えてください。メールの件名には、「第56回日本緑化工学会大会・見学会について」とお書きください。また、本文には、お名前〔ふりがな〕／ご所属／お問い合わせ内容をお願いします。

8. 研究発表の種別と申し込み

(1) 発表の種別

例年、日本緑化工学会研究発表会の発表は、学会誌大会特集号への投稿が必要な「論文部門」と「技術報告部門」での発表と、学会誌への投稿を必要としない（要旨の提出は必要）「研究交流発表部門」の3つに分けて行われます。

(2) 論文部門と技術報告部門の発表・学会誌への投稿

論文部門と技術報告部門の発表・投稿申込については、大会特集号の募集案内をご覧ください。

9. 研究交流発表部門

(1) 研究交流発表部門（研究交流発表会）の発表募集

より多くの会員に発表と意見交換の場を提供するために、学術的あるいは応用技術的な緑化に関わるさまざまな話題を募集します。発表はポスター形式のみとし、発表者にはポスターの他 A4 用紙 1 ページの要旨作成が求められます。これらのポスター・要旨の校閲審査はありません。

(2) 発表資格

日本緑化工学会正会員、学生会員および賛助会員組織に属する方に限ります。また、連名の場合には筆頭者が正会員、学生会員および賛助会員組織に所属する方であることが必要です。

(3) 申込方法

希望者は大会参加申込の Google フォームに必要事項を入力してください。その際、要旨

原稿もアップロードしてください。

【Google フォーム内での入力内容】

表題

発表者全員の氏名と所属

代表発表者の連絡先（電話，メールアドレス）

優秀ポスター賞への応募の有無（若手のみ）

要旨原稿のアップロード（PDF 形式，10MB まで）

【申込締切】研究交流発表申込，要旨原稿提出，優秀ポスター賞応募の締め切りは 2025 年 7 月 25 日（金）です。

(4) 要旨原稿・ポスターの作成

要旨作成要領（テンプレート），ポスター作成要領は大会ウェブサイトから入手してください。

(5) 優秀ポスター賞への応募

日本緑化工学会では若手研究者および若手技術者を奨励するため，若手会員を筆頭者とするポスター発表を対象として，日本緑化工学会大会に相応しい優れたポスターを，論文部門，技術報告部門，研究交流発表部門のそれぞれから選出し，大会期間中に表彰いたします。応募者は，優秀ポスター賞表彰式までお残りください。

【応募資格】

ポスター賞に応募するためには，筆頭発表者が学生会員であるか，大学卒業後あるいは大学院修士課程・博士課程修了後 5 年程度までの正会員であることが必要です。

【応募方法】

研究交流発表部門の優秀ポスター賞に応募する場合は，大会参加申込の Google フォームに入力してください。

※論文部門と技術報告部門の優秀ポスター賞への応募については，大会特集号への投稿申込時に受け付けていますので，大会参加申込の Google フォームに入力する必要はありません。

10. 宿泊

京都・大阪の会場周辺にホテルは多くありますが，行楽時期や他のイベント開催に重なりますのですぐに満室になる可能性があります。部屋を早めに確保することをお勧めします。

11. 会場までのアクセス

京都大学芝蘭会館・別館（京都市左京区吉田近衛町・吉田牛ノ宮町）

<https://www.med.kyoto-u.ac.jp/facilities/shiran/access/>

京都大学生生活協同組合吉田食堂（京都市左京区吉田本町）（仮※）

<https://maps.app.goo.gl/gfvp5EZMXZ4X7uSL9>

大阪・関西万博会場（大阪市此花区夢洲）

<https://www.expo2025.or.jp/expo-map-index/access/>

※情報交換会の会場は未定です。

12. 会場の Wi-Fi について

Wi-Fi は京都大学芝蘭会館別館 2 階の研修室 1（休憩室にあてる予定の部屋）で使用可能です。主会場となる京都大学芝蘭会館では eduroam のみを使用可能ですので、ご注意ください。大学関係者は eduroam を使用できますが、事前の設定や当日の接続方法については各自の所属大学からの案内をご確認ください。

13. 大会運営委員会

委員長：今西純一（京都大学）

委員：貫名 涼（京都大学）、深町加津枝（京都大学）、福井 亘（京都府立大学）、
岡田準人（大阪産業大学）

〔事務局連絡先〕

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学大学院 農学研究科 森林科学専攻 環境デザイン学研究室内

第 56 回日本緑化工学会大会事務局

TEL：075-753-6099（貫名） FAX：075-753-6082

メール：ryokkako.taikai.56★gmail.com

※メールアドレスの★は@に置き換えてください。

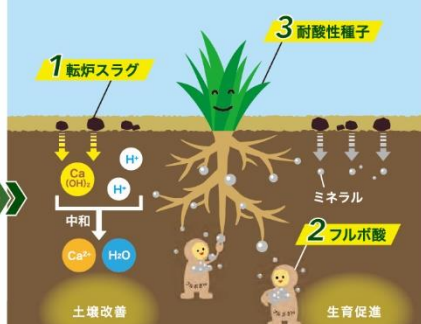
3つの特長で強酸性土壌を長期的に緑化!

強酸性土壌では…

pHとは 土中の水素イオン濃度の事。
水素イオン濃度が高い程、pHが低くなる。



グリーンスラッガーを使うと!



1 転炉スラグにより 2 フルボ酸により 3 耐酸性種子の活用

転炉スラグが酸性土壌を中和し、植物の育ちやすい環境に! ミネラル分も豊富に含まれます。

フルボ酸が肥料分をキレート化し、ミネラルの吸収効率UP!

酸性環境に強い種子を活用する事で、長期的な緑化を可能にします!



9月 施工5か月後



【静岡県】

pH / 3.0
勾配 / 1:1.8
土質 / 礫混じり土

4月



グリーンスラッガー フルボシリーズ

pH 3.0~5.0 の強酸性土壌の緑化に!

GREEN SLUGGER SERIES

第4回「エコプロアワード」奨励賞受賞
第6回「ジャパン・レジリエンス・アワード」
優秀レジリエンス賞受賞



前田工織株式会社

東京本社 / 〒105-0011 東京都港区芝公園2-4-1
東京営業部 芝パークビルA館12F
TEL.03-6402-3944

福井本社 / 〒919-0422 福井県坂井市春江町沖布目38-3
福井営業部 TEL.0776-51-9200

プラスチック製ラス網

プララス網

新技術情報システム (NETIS) 登録番号 HK-240004-A

吹付工に用いるプラスチック製のラス網です。
繊維製ネットのため、軽量で防錆性・付着性に優れ、
従来の亜鉛メッキ鉄線製の菱形金網の代替として使用できます。

特長 1 軽い

200g/㎡と軽量で、
設置作業等の負担が
軽減されます。



特長 2 錆びない

耐薬品性のある
化学繊維で構成
錆が発生しません。



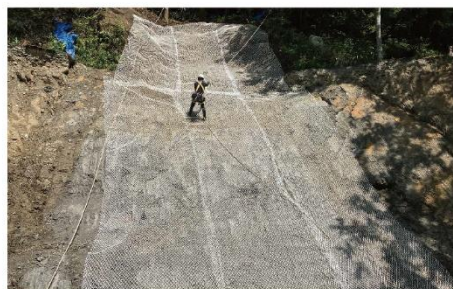
特長 3 付着性抜群

ネット材にパイルを有しているため、
モルタルが絡みやすくなり付着します。



独自の技術
このループ状が付着のポイント

モルタルが
しっかり
付着して
液だれしない



「日本緑化工学会賞」受賞候補者の推薦について

日本緑化工学会は、緑化工に関する学術および技術の進歩をはかるため、緑化工に関して特に優れた業績をあげた日本緑化工学会員に「日本緑化工学会賞」を授与します。つきましては、下記の受賞候補者推薦要領により受賞候補者を募りますので、会員各位には所定の「推薦書」（次ページ）に必要事項を記入の上、「業績資料」を添えて、令和 7 年 5 月 16 日（金）までに推薦（会員による他薦）していただくようお願いします。審査は「日本緑化工学会賞規定」により選出された「日本緑化工学会賞選考委員会」が行い、学会総会において受賞者を発表し、受賞者には表彰状ならびに賞牌を贈呈します。

「日本緑化工学会賞」受賞候補者推薦要綱

1. 論文賞：日本緑化工学会誌や Landscape and Ecological Engineering の掲載論文複数を含めて筆頭著者または責任著者（Corresponding author）の査読付論文 3 本程度以上のまとまりのある優れた研究、あるいは学術的著書に対し授与する。
2. 技術賞：優れた緑化・自然再生現場の担当者に授与する。また、優れた著書等も対象とする。
3. 功績賞：緑化学の発展に寄与された方々に対し授与する。
4. 研究奨励賞：まとまりのある今後の発展が期待される日本緑化工学会誌や Landscape and Ecological Engineering に掲載された筆頭著者または責任著者（Corresponding author）の査読付論文 2 本程度の研究に対し授与する。特に若手会員（学生会員であるか、大学卒業後あるいは大学院修了後 5 年程度までの正会員）への推薦も推奨する。
5. 技術奨励賞：筆頭著者の技術報告 3 本程度以上のまとまりのある報告に対し授与する。施工者あるいは発注者等も併せて対象とする。

学会賞規定

平成 5 年 4 月 20 日制定

- 第 1 条 緑化に関する学術および技術の進歩を図るため、日本緑化工学会賞（以下学会賞という）を設ける。
- 第 2 条 学会賞は緑化工に関して、特に優秀な業績をあげた日本緑化工学会員に授与する。
- 第 3 条 学会賞の授与は毎年度 1 回行うものとし、総会の席上で会長が授与する。ただし、授与該当者がいない場合はこの限りでない。
- 第 4 条 学会賞を授与される者（以下受賞者という）を選考するために、日本緑化工学会賞選考委員会を設ける（以下委員会という）。
- 第 5 条 受賞者の決定は委員会の選考結果に基づき、理事会が行う。
- 第 6 条 委員会は委員 5 名以上 12 名以内、幹事若干名をもって構成する。委員および幹事の任期は 2 年とする。ただし、再任は妨げない。
- 第 7 条 委員は理事会が選考し、会長が委嘱する。委員は互選により委員長を定める。委員長は委員のうちから副委員長を指名することができる。幹事は委員長が指名する。
- 第 8 条 受賞者の選考は委員の 3 分の 2 以上の出席の下に行う。ただし、文書をもって出席に代えることができる。
- 第 9 条 受賞者の選考手続きに関して必要な事項は委員会で定める。
- 第 10 条 本規定は理事会の承認を得て変更することができる。
- 第 11 条 本規定は平成 5 年 4 月 20 日より施行する。

日本緑化工学会賞候補者推薦書

令和 年 月 日提出

受賞候補者	氏名		生年月日	
	所属 住所 連絡先：Email TEL		年 月 日	
部 門	論文賞 ・ 技術賞 ・ 功績賞 ・ 研究奨励賞 ・ 技術奨励賞			
推薦対象の 題 目				
推 薦 者	氏 名	印	所属・ 職	
	住 所			
	連 絡 先	Email	TEL	
推薦理由				

推薦にあたっては「受賞候補者推薦要領」を読んで下さい。

1. 受賞候補者は個人あるいは企業等団体の代表者（技術奨励賞は発注者も含める）とします。
2. 被推薦者または団体が発表された業績資料のリストを添付してください。過去に学会賞の受賞歴のある候補者については、業績リストに受賞歴も含めてください。業績資料はPDF化し、本推薦書と共に以下の提出先まで電子メールで送付してください。電子メールの件名は「日本緑化工学会賞推薦書類」と記入してください。なお、書籍の場合は業績リストにISBNコードを記入して頂ければPDFの送付は必要ありません。
3. 提出期限：令和7年5月16日(金)（期限厳守）電子メール提出後5日以内に受け取り確認の連絡がない場合には、提出先にお問い合わせください。

提出先：日本緑化工学会 学会賞選考委員会 岩崎 寛 E-mail：iway@faculty.chiba-u.jp

日本緑化工学会賞 受賞者一覧

令和5年度(2024年9月授与)

研究奨励賞：松岡達也「屋上緑化におけるセダムの混植が蜜源植物の生育に及ぼす効果に関する一連の研究」

技術奨励賞：佐藤厚子「メッシュシートを用いたオオイタダリの生育抑制手法の開発に関する一連の研究」

功績賞：小林達明「緑化分野における再生生態学の研究と普及に関する功績」

令和4年度(2023年9月授与)

技術賞：中村華子「地域性種苗を利用した植生再生技術の社会実装を目指した一連の研究」

令和3年度(2022年9月授与)

研究奨励賞：武井理臣「日本産ガマズミ属種子の形態生理的休眠の打破および早期発芽に関する研究」

研究奨励賞：西野文貴「シダ植物の増殖方法としての孢子発芽と前葉体成長に関する研究」

功績賞：森本幸裕「生物多様性に配慮した都市の緑化に関する研究および実践に関する功績」

令和2年度(2021年9月授与)

研究奨励賞：人見拓哉「都市化に伴う緑地土壌での有機物分解特性の変化」

令和元年度(2020年9月授与)

研究奨励賞：宮崎直美「北海道十勝地方の都市人工林における在来草本・木本の再生・更新過程に関する一連の研究」

技術奨励賞：伊東日向「海岸林の構成樹種における発芽から稚樹段階の耐塩性評価」

技術奨励賞：小野幸菜「自然回復緑化および在来植物種子の最適な取り扱いに関する技術開発」

技術奨励賞：寺本行芳「荒廃地等における表層土の安定性予測技術と植生による減災効果の検証」

功績賞：増田拓朗「四国香川における都市緑化，里山～里海の保全活動の展開」

平成30年度(2019年9月授与)

論文賞：宗岡寿美「積雪寒冷地の法面保全と緑化工技術の応用に関する一連の研究」

研究奨励賞：黒沼尊紀「屋上緑化における環境改善能の定量化と環境影響評価」

研究奨励賞：中島有美子「立地条件に応じた広葉樹海岸林の樹林目標に関する研究」

技術奨励賞：戎谷 遵「瀬戸内海沿岸における海浜植生の保全エリアの抽出技術」

平成29年度(2018年授与)

技術賞：東日本高速道路株式会社 木更津工事事務所

「首都圏中央連絡自動車道(圏央道)における野生動物の道路横断構造物の設置」

研究奨励賞：七海絵里香「緑化植物との関わりの史的研究」

研究奨励賞：矢動丸琴子「オフィス緑化が勤務者の心理に与える影響に関する研究」

研究奨励賞：小宅由似「法面における植生ならびに土壌に関する一連の研究」

技術奨励賞：小川泰浩・東京都三宅支庁産業課「火山性荒廃地の環境保全に配慮した治山緑化工法の開発」

平成28年度(2017年授与)

論文賞：鈴木弘孝「壁面緑化による温熱環境改善効果に関する一連の研究」

論文賞：中村 剛「表土利用工および自然侵入促進工によって緑化された裸地斜面の植生回復に関する研究」

技術賞：入山義久「緑化植物の種子生産及び性状・性質に関する研究と開発」

技術賞：田中 淳「法面におけるクズの管理方法に関する一連の技術開発」

技術賞：福田尚人「地域自生種を用いた寒冷地法面の緑化工技術の開発と普及」

功績賞：丸山純孝

平成27年度(2016年授与)

論文賞：加藤真司「都市緑化の評価に基づいた緑化便益の増進手法に関する研究」

論文賞：田崎冬記「寒冷地における貴重動植物を含む河川環境保全に関する一連の研究」

研究奨励賞：大塚芳嵩「都市緑地における利用行動と地域住民の健康との関連性に関する研究」

研究奨励賞：濱田 梓「京都市近郊部における農地形態・土地利用と鳥類生息との関わりについての研究」

功績賞：江崎次夫

功績賞：吉川 賢

平成26年度(2015年授与)

論文賞：岩永史子「樹木の環境ストレス耐性に関する研究」

論文賞：執印康裕「森林の崩壊防止機能の定量的評価に関する研究」

論文賞：山瀬敬太郎「山地荒廃斜面の緑化と斜面安定に関する研究」

研究奨励賞：飯田義彦「奈良県吉野山のヤマザクラ集団に関する生物季節学的研究」

平成 25 年度(2014 年授与)

論文賞：今西純一「リモートセンシングによる樹木の活力度評価に関する研究」

論文賞：那須 守「都市緑地の保有する健康関連 QOL に関する研究」

研究奨励賞：寺南智弘「乾燥地に生育する数種樹木の樹形、成長に及ぼす砂の移動の影響に関する研究」

功績賞：奥水 肇

功績賞：近藤三雄

平成 24 年度(2013 年授与)

論文賞：上町あずさ「テイカカズラ類の分類体系の整理と交雑の可能性に関する研究」

技術賞：下園寿秋「林道切土法面における鹿児島県下の地域性を考慮した緑化技術の開発」

技術奨励賞：田中賢治「緑化基盤の化学性調整による植生制御に関する一連の技術」

功績賞：千葉喬三

功績賞：太田猛彦

功績賞：長谷川秀三

平成 23 年度(2012 年授与)

技術賞：東京電力株式会社 代表：齋藤与司二「自主生産による地域性種苗を用いた自然回復緑化の取り組み」

研究奨励賞：淑 敏「緑陰形成による駐車場の熱環境改善効果の定量的評価に関する研究」

平成 22 年度(2011 年授与)

技術賞：日置佳之・サントリープロダクツ株式会社 天然水奥大山ブナの森工場・西武造園株式会社
「サントリー天然水奥大山ブナの森工場における生物多様性緑化」

技術賞：東興ジオテック株式会社 日本樹木種子研究所「在来木本植物種子の早期発芽能力検定方法」

技術賞：日本植生株式会社「表土シードバンクを利用した吹き付け工法(マザーソイル工法)の開発とその検証」

功績賞：亀山 章

平成 21 年度(2010 年授与)

論文賞：岡 浩平「海浜植生の成帯構造の保全・復元に関する研究」

奨励賞：呉 初平「マツ枯れ荒廃林におけるマツ林再生の試みに関する研究」

平成 20 年度(2009 年授与)

技術賞：亀山 章「東京農工大学フィールドミュージアム唐沢山における在来種をもちいた法面緑化試験」

平成 19 年度(2008 年授与)

論文賞：近藤哲也「野生植物の種子発芽特性の解明と植生回復への利用に関する研究」

論文賞：大澤啓志「絶滅危惧植物ミズキンバイが生育する環境の復元・創出に関する研究」

論文賞：細木大輔「森林の土壌シードバンクを利用した緑化技術に関する研究」

平成 18 年度(2007 年授与)

論文賞：内田泰三「自生種を利用した緑化ならびに植生回復に関する研究」

論文賞：高 政鉉「土壌シードバンクを用いた自然回復緑化手法の有効性に関する研究」

論文賞：根本 淳「都市近郊コナラ二次林の林床植生管理に関する研究」

技術賞：小澤徹三「道路緑化分野における樹液温度を用いた樹木活力度評価に関する技術開発」

平成 17 年度(2006 年授与)

論文賞：小林達明「内湾渚再生に関する地域生態学的研究」

論文賞：笹木義雄「瀬戸内海の半自然海岸および人工海岸に成立した海浜植生の自然性を評価する手法の開発」

論文賞：山中典和「中国乾燥地における植生回復に関する樹木生理生態学的研究」

技術賞：小林達明・倉本 宣「生物多様性緑化ハンドブック」の編集

平成 16 年度(2005 年授与)

論文賞：藤原宣夫「植栽樹木の二酸化炭素固定量から見た都市緑化施策の評価」

平成 15 年度(2004 年授与)

論文賞：三木直子「アカマツの生理生態的特性とまつ材線虫病発現の関係」

論文賞：森本淳子「野生ツツジ群落の保全と復元に関する研究」

平成14年度

論文賞：星子 隆「高速道路のり面の植生遷移に関する一連の研究」

技術賞：日本道路公団関西支社 大津工事事務所「森のお引っ越し」事業

奨励賞：内田泰三「ヨシ属、特にヨシおよびツルヨシを用いた水域緑化と河畔緩衝帯の造成に関する研究」

平成13年度

論文賞：高橋輝昌「緑地土壌の化学的・生物学的養分特性及び改善に関する研究」

功績賞：安保 昭

平成12年度

論文賞：吉田 寛「厚層基材吹付播種工による樹林化とその評価に関する一連の研究」

平成11年度

功績賞：山寺善成

功績賞：吉田博宣

平成10年度

論文賞：嶋 一徹「発達過程にある森林での窒素集積と生物窒素固定に関する研究」

技術賞：日本道路公団試験研究所「道路のり面における自生種を用いたユニット苗工法による植生復元技術の開発」

平成9年度

技術賞：日本道路公団中国支社「中国横断自動車道総社地区自然環境対策（ひいご池湿原の保存）」

功績賞：小橋澄治

功績賞：堀江保夫

平成8年度

該当者なし

平成7年度

技術賞：長谷川秀三「土壌調査器具の開発と応用に関する研究」

功績賞：塚本良則

功績賞：村井 宏

平成6年度

功績賞：太田重良

功績賞：北村文雄

平成5年度(第一回)

功績賞：倉田益二郎

功績賞：新田伸三

鹿食害対策一体型植生マット

クサマモール

鹿の食害対策に！

植生マットと対策ネットを一体化した工法です。

食害対策ネットは、植物の成長と共に持ち上がることで、植物を食害から守ります。さらに、食害対策ネットで守られた植物は、のり面を保護し植生工としての機能が保持されます。

鹿の踏み荒らし対策には

「アニマルガード工法」をおすすめします。



施工後3ヵ月

詳しくは日本植生HPへ



Nikon 太陽と緑の国づくり **日本植生株式会社**

本 社：岡山県津山市高尾573-1
TEL 0868-28-0460 FAX 0868-28-4850

営業所：青森・盛岡・仙台・東京・神奈川・栃木・新潟・名古屋・長野・金沢・大阪・岡山・広島・島根・高松・松山

それは、人を守る緑。

自然の植生を再生し、
地球環境を守る第一歩をお手伝いします

NEW!!

表層1mまでの土砂崩落抑制工法

ロンストロングネット



それは、人を守る緑。

ロンタイ®株式会社

【本社】〒570-0011 大阪府守口市金田町3丁目1番11号
【TEL】(06)6902-9401 【FAX】(06)6905-9070
【支店・営業所】札幌・仙台・関東・静岡・大阪・四国・広島・福岡・鹿児島
【E-mail】info@rontai.co.jp 【ホームページ】https://www.rontai.co.jp



ロンタイは2022年9月1日、
SDGs宣言を行いました。



日本緑化工学会 乾燥地緑化研究部会

公開シンポジウム 2025

「東アフリカ・ジブチ共和国における東京農業大学の乾燥地研究の30年」

○日時：2025年7月5日（土）13時00分～16時30分（予定）

○場所：東京農業大学

○方法：ハイブリッド（対面およびzoom ミーティング 併用）

○参加申込URL：<https://forms.gle/Cn6Wu8SCPWziD3q28>

＊参加方法（対面、Zoom）に関わらず、参加申込を行ってください

＊開催日の一週間程度前に【対面参加の方には開催場所の詳細を、Zoom参加の方には接続方法を】登録されたメールアドレスにご連絡申し上げます

○参加費：無料

主催：日本緑化工学会乾燥地緑化研究部会

後援：日本沙漠学会沙漠工学分科会

後援：東京農業大学沙漠緑化研究部会/沙漠に緑を育てる会

○開催の趣旨

「Horn of Africa」と呼ばれる東アフリカの一角に位置するジブチ共和国。世界一暑い国とも称される小国で、30年以上脈々と乾燥地研究が続けられてきた。同国における研究活動は、乾燥地緑化へ挑戦するというシンプルな目標を示したプロジェクトに端を発しているが、今や取り扱う課題の裾野は、限られた水資源による水収支、遊牧民の家畜による食害、有用な植物や藻類の活用など、広範に渡っている。コロナ禍を含む6年間進められてきたSATREPS（地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム）も終了を迎えた今、これまでどのような課題に対してどのような解決策が見いだされてきたのか振り返るとともに、今後の展望について考える機会としたい。

○プログラム

13:00－13:05

開会のあいさつ 三木直子（乾燥地緑化研究部会 岡山大学）

13:05－14:05

基調講演 ジブチ国における東京農大の砂漠緑化研究プロジェクトの歩みと成果
渡邊文雄（東京農業大学地域環境科学部）

14:05－14:30

講演1 ジブチにおける水資源・農地化ポテンシャル評価とSATREPS研究の成果
島田沢彦（東京農業大学地域環境科学部）

14:30－14:40 休憩

14:40－15:05

講演2 ジブチにおける環境資源の現状と未来に向けた持続的利用について
浅倉康裕（東京農業大学地域環境科学部）

15:05－15:30

講演3 ジブチ・アッベ湖で見つかったスピルリナに関する研究
渡辺 智（東京農業大学生命科学部）

15:30－15:55

講演4 ジブチにおけるアグロパストラル・システム型作物生産の現状と課題
篠原 卓（東京農業大学国際食料情報学部）

15:55－16:10 休憩

16:10－16:30

質疑応答・総括
吉崎真司（乾燥地緑化研究部会 東京都市大学名誉教授）

○問い合わせ先

乾燥地緑化研究部会（東京農業大学 橘 隆一）revegdryland@gmail.com

○講演要旨

【基調講演】 ジブチ国における東京農大の砂漠緑化研究プロジェクトの歩みと成果
渡邊文雄（東京農業大学地域環境科学部）

ジブチ共和国における砂漠緑化の研究活動は、東京農業大学の創立100周年記念事業として1991年に開始され、今年で35年目を迎える。当時は、創立100周年という節目にあたり、「砂漠緑化へのチャレンジー ジブチ共和国での試みー」というタイトルのもと、地球規模の環境問題への貢献を目的としてプロジェクトが立ち上げられた。現在では、プロジェクト開始当初から関わっていた多くの関係者が定年退職等により現場を離れているが、筆者は1994年より現地調査に参加し、以後継続的に活動を行ってきた。本報告では、これまでの研究活動の歩みとその成果について報告する。なお、2025年6月をもって終了するジブチ国のJICA/SATREPSプロジェクトの成果については、各講演者より詳細に報告される。

【講演 1】ジブチにおける水資源・農地化ポテンシャル評価とSATREPS研究の成果
島田沢彦（東京農業大学地域環境科学部）

ジブチSATREPSプロジェクトでは、構築した水文地質構造モデルを用いた地下水循環シミュレーションにより、水資源ポテンシャルの評価を行った。また、衛星画像解析と家畜の行動データに基づき、物質循環の視点から牧養ポテンシャルの評価も行った。これらの成果を踏まえ、極乾燥地ジブチにおける持続可能な農牧業の実装ケース拡大の可能性について検討する。

【講演 2】ジブチにおける環境資源の現状と未来に向けた持続的利用について
浅倉康裕（東京農業大学地域環境科学部）

ジブチはすべての生命活動にとって、非常に過酷な環境であることは想像に難くない。その最も大きな要因として考えられるのは、水と森林資源の圧倒的な少なさだろう。私たちがこの限られた資源を有効に利用し、そして持続的に未来へ繋いでいくためにはなにをしていくべきなのか、私が同国で行ってきたマングローブと地下水の研究を軸に、皆様と議論できればと思います。

【講演 3】ジブチ・アッベ湖で見つかったスピルリナに関する研究
渡辺 智（東京農業大学生命科学部）

スピルリナは、栄養価が高く、健康食品として用いられているシアノバクテリアの一種である。ジブチ共和国でのスピルリナの活用を目指し、ジブチとエチオピアの境界に位置するアッベ湖を調査した。その結果、同湖が強アルカリ性の塩湖であること、そしてスピルリナが自生していることを確認した。アッベ湖から単離したスピルリナは既知種とは異なる形態を示しており、本講演ではこの原因について議論したい。

【講演 4】ジブチにおけるアグロパストラル・システム型作物生産の現状と課題
篠原 卓（東京農業大学国際食料情報学部）

ジブチ共和国の様な熱帯乾燥地において、浅層地下水を利用したアグロパストラル・システムによる持続可能な作物生産の実現に向けて、高効率灌漑技術、土壌改良技術、作物栽培技術の3本柱を中心に、課題克服に向けた取組を紹介する。

研究ノート Research Note

なぜ生物多様性を市民科学で扱うのか？

倉本 宣

明治大学農学部／生物多様性緑化研究部会 (kura@meiji.ac.jp)

研究グループの指導者から「会費の安い学会があるから入らないか」といわれて、緑化工学会に入会して 30 年余りが経過しました。私は大学院生のときは基礎学としての生態学を研究していて、ジェネラリティのある法則をみつけることを使命とする基礎学は自分に合っていないことに気づき、応用生態学に転じたばかりでしたので、渡りに船とばかりに入会しました。理事会に出るようになり、理事会に出るのだったら研究部会も担当しようと考えて、生物多様性緑化研究部会を立ち上げました。この名称は大きすぎて、他の会員の活動の邪魔になりかねなかったと今では反省しています。

市民科学やシチズンサイエンスという用語は時間的な変化も加味されて一義的ではありません。日本学術会議若手アカデミー（2020）「シチズンサイエンスを推進する—社会システムの構築を目指して—」は以下のように述べています。「シチズンサイエンスは、職業科学者ではない一般の市民によって行われる科学的活動を指す。我が国では、社会課題の解決に重きを置く「市民科学」と呼ばれる活動が既にあるが、シチズンサイエンスは、市民科学に加えて、学問体系における科学的規範に則った知識生産も包含する、より広範な科学的活動とされている。すなわち、一定の目的・方法のもとに種々の事象を研究し、その成果としての体系的知識を増やす活動がシチズンサイエンスには含まれる。また、シチズンサイエンスは、しばしば職業科学者との協調により、もしくはその指導の下で行われ、世界的に拡大しつつある。」「市民科学」を科学の中に位置づけたものが「シチズンサイエンス」であるとの立場です。それには市民科学者と職業科学者との協調が有効であり、世界的に拡大しているとされています。

まず、シチズンサイエンスと市民科学にはこのように明確な区別が確立しているわけではありません。市民科学者と職業科学者との協調に限らず、市民科学とは市民が科学にかかわることという立場も存在し、私たちはこの立場を採用しています。1980 年タンポゴ調査、1983 年伊豆大島動植物分布調査（緑の国勢調査）、1986 年伊豆大島三原山噴火後 10 年間調査、1988 年国立市ツバメの巣分布調査、国立市市街地サウンドスケープ調査（国立市動物調査）、1992 年府中四谷橋架橋工事現場におけるカワラノギク保全調査、2002 年カワラノギクプロジェクト、2019 年アブラコウモリ分布調査などに参加してきました。応用植物生態学研究室では卒業研究のテーマの範囲に制限を設けていないので、生きものに素養のある学生もまったくない学生も所属しています。この素養のない学生を一般の市民に見たてて、素養のある学生との協働として、小規模な緑地のビオトープ機能、区立公園としては大

き公園内部の種子散布に関する調査、大学キャンパスとその周辺の地形などを調べてきました（千代田学、多摩区連携事業）。川崎市には小学校ごとに寺子屋があり、週に 1 回の勉強の補習と、月に 1 回の催しを行っています。この催しにおいては学生実習で使用するバットディテクターやニコンファールが活躍してきました。コウモリ観察会はみた・まちもり寺子屋の 3 名のコアメンバーによって準備や観察ノートの作成も含めて運営できるようになっています。しかも、2022 年の暑い夏には、毎年利用しているフィールドからアブラコウモリが消えたという寺子屋さんの通報がありました。上野動物園では葛西臨海公園でアブラコウモリを見る催しを開催していたので、ようすを聞いてみると、アブラコウモリがムクドリくらいたくさんいたという返事でした。そこで、涼しそうな場所を探して図-1 の写真の多摩川河川敷に行ってみると、アブラコウモリがいたのです。これは毎年コウモリ観察会を行ってきた成果だと考えています。モニタリングと評価の能力が寺子屋さんに身に付いたのです。



図-1 コウモリ観察会(2023 年, 2024 年) 参考資料 3 の一部



図-2 明大通り（街路樹プラタナスの伐採問題）



図-3 さくら通り（街路樹ソメイヨシノの伐採問題）

一方、生物多様性についての市民の認識と、私たちの認識には未だにギャップがあるようです。緑についての認識では一般市民と変わらない明治大学の教員には明大通りの街路樹プラタナスの伐採と新たな街路樹の植栽に対して反対の方が多く、当時の学長は自分が 50 年間見てきたプラタナスを伐採するなんてとんでもないという発言をしていました。私のところにも、近隣の大学の先生から電話がかかってきました。生物多様性保全の研究をしているのなら、当然街路樹の伐採には反対でしょうから一緒に反対しなさいという内容でした。外来種を守ることが生物多様性を守ることとは反対のことと申し上げたところ、電話の主は驚いて電話を切ってしまいました。駿河台キャンパスでは街路樹の大切さにかかわる学習会がくりかえし開催され、緑化工学会の元会長の興水肇先生も登壇されました。

自分の仕事とは直接関係のない場所で街路樹の伐採問題についてどんな意見があるのか学ぶために、私自身が反対の団体に参加してみました。工事は、事故の多い国立市のさくら通りを片側 2 車線から 1 車線にして自転車専用レーンを設け、老木となった染井吉野を神代曙に植え替えるというものでした。染井吉野の開花直前に伐採が始められたため、「せめて花を咲かせてやりたかった」という意見が多く、ヒトも樹木も生きているので生きている者同士の連帯感を感じました。もう少し経つと、染井吉野の裏側に樹木の霊が見える方が現



図-4 ヤドリギのサイン（全国都市緑化かわさきフェア）

れました。私も何度か試してみましたが、一向に見えませんでした。価値観の問題なので、科学技術の側が常に正しいと言い切ることは躊躇するものの、擬人化や精神主義では現実の物事を解決することはむずかしいので、科学的な態度や思考方法を普及することが緑化工学会の対象とする「緑」においては必要だと感じました。それで、作成してみたものが図-4 です。西洋では落葉期に緑色をしていてめでたつので、聖なる植物として扱われているヤドリギについて、名前を知っていても実物を見たことがある方は少ないようです。1 週間ほどヤドリギを探してみたら、東高根森林公園、日野市東豊田緑地保全地域、町田市の図師小野路歴史環境保全地域近傍などたくさんある場所や、1 株だけある場所などが見つかりました。電車の窓から大木を探していたら、2 か所で見つかりました。大木には、カラスの巣、スズメバチの巣、キツタなども見つかりました。登山用のマットを敷いて子どもたちと真上を見上げると、枝ぶりや空が見える割合がわかります。地上移動動物である私たちは二次元の世界に生きていますが、野鳥や昆虫などの空中移動動物にとってはこの世は 3 次元です。そう思うと、樹木の生長など、時間軸のある世界に生きるようになって、植生遷移を生かした緑化工学のファンになってももらえるのではないのでしょうか。

私たちの部会では技術者と市民をつなぐ zoom 連続講演会を 9 月まで毎月 1 回開催しています。お問い合わせは eco@meiji.ac.jp まで。

参考資料

- 1) カワラノギクハンドブック 16 ページ 2022
- 2) ウラギクハンドブック 16 ページ 2024
- 3) 多摩区の自然とわたしたち 4 ページ 2025

いずれも明治大学農学部応用植物生態学研究室発行。
kura@meiji.ac.jp にご連絡をいただければ郵送します。

研究ノート Research Note

緑化の居酒屋談話 侵食防止には植被率でしょの巻

田中 淳

国土防災技術株式会社 (jun-tanaka@jce.co.jp)

新にコミュニティレターが刊行されました。当初はニュースレターという仮称で進んでいましたが、会員間のコミュニケーションを促進するためのツールとしたいという強い思いを持つ会員の提案から、このような名称となりスタートしたと聞いています。最近、日本緑化工学会に参加する多くの民間企業からの発表が少なくなっています。昨年の第55回大会の論文、技術報告の中で筆頭者が民間企業は8/38件でした。ために民間企業の技術者に、どのような記事なら読みたいかと聞いてみました。「工事報告のようなもの」、「特に・・・緑化の雑談かな」など、いくつかの回答が得られました。ではどうするか？居酒屋談話のように、ほぼ役に立たないけど、なんとなく楽しい、そして、ごくまれに「いいね！」というような会員間のコミュニケーションを促進するような、気楽で楽しく、そしてちょっぴりためになる話題を書いてみたいと思います。

居酒屋グリーン（ベタだな～）、オープンです。

私が緑化業界に入って約30年が経過し、気がつけば、「それやったことある」、「別の場所でやったという報告がある」などいわゆる年配者のありがちな発言が多くなってきました。一方で、案外常識と思われるような基本的なことを知らない技術者も多いなとも思います。私も昔は、「業界のベテラン技術者からそれ、昔やったことある」とよく言われたものです。今ほど情報入手が容易ではなかった時代ですから、論文や技術的な資料、工法技術マニュアル、事例など多くの情報入手するのは大変でした。さまざまなコミュニケーション手段を駆使して手に入れたものです。

緑化工発展史⁹⁾や、これを補足した緑化工戦後50年¹⁰⁾などを見ると古い参考文献が記載されていますが、容易に入手できないものも多くあります。少し前に発見したのですが、国会図書館のデジタルコレクションには緑化工概論³⁾や緑化工技術⁴⁾をはじめ鉄道技術研究報告や日本道路公団試験研究所報告などを国会図書館に行かずに見ることができます。会員登録に費用も掛かりません。

国会図書館のデジタルコレクションや「それ俺、知ってる」という文献から、のり面緑化の創成期、表面侵食防止に緑化が示す効果の話題を整理していきたいと思います。ちなみこの内容は、2023年の第54回日本緑化工学会大会の研究集会4、「高強度の降雨に対応する斜面緑化を考える（II）」の話題提供の一部です。

森林・植生の植被率と侵食

森林内の林床植生や堆積物が土壌侵食を防止する効果のあ

ることは一般的に認められ、報告も多く出されています。古くは川口ら¹⁾や村井ら⁸⁾が、地被物の状態などによって侵食防止機能が異なることを示しています。北原²⁾は、「森林など植生の表面侵食防止機能は絶大である。水源かん養や防風など数ある森林の公益的機能の中でも、この機能は、非の打ち所がないほど素晴らしい機能である。」とし、「以下の5つの機能が総合的に発揮されるため表面侵食が激減する。」と述べています。

- 1) 雨滴に対して植物の地上部や落葉層によって雨滴エネルギーを減殺する機能。
- 2) 雨水が地表面に到達した後は、表面を流れる地表流の流速を茎や幹、落葉層によって流速を減殺する機能。
- 3) 地表面に達した雨水を落葉層や土壌に浸透させ表面流量を減少させる機能。
- 4) 地表流に対して植物の根系が土壌粒子を緊縛させ流出させない機能。
- 5) 落葉層や根系層が地表面に発達し、断熱層となることから冬期間の土壌の凍結・凍上することを防止する機能。

これを斜面や法面緑化対策に当てはめれば、斜面上を植物や落葉・落枝など何かで地表面を覆えば侵食は防止できると考えられます。もちろん、後の緑化のことを考えれば、植生が繁茂しすぎるのはよくありません。侵食防止機能は向上するかもしれませんが、成長の遅い木本植物や周辺植生の新たな植物の再生は困難となるでしょう。吉田¹³⁾は「初期の芝草の植生状況の影響が17年経過した時点でも残っている」と報告していますし、山寺¹²⁾（文献は、ほぼ同様の内容が博士論文としても存在しますが、今回は手元にある報告書から引用しています。）は、草種（オーチャードグラス、クリーピングレッドフェスク：図-1）の播種密度を増すとヤマハンノキ

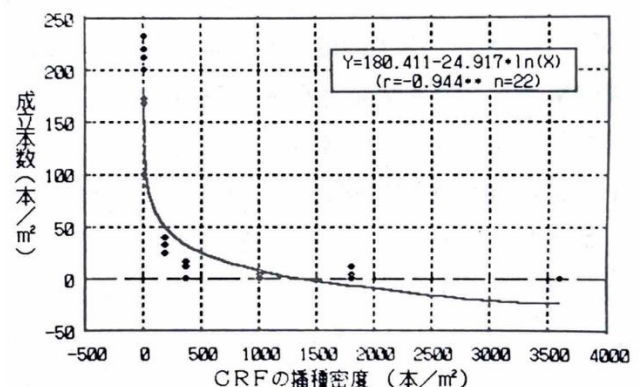


図-1 CRFの播種密度とヤマハンノキの成立本数との関係¹²⁾

の成立本数は急速に減少することを実験的に証明しています。

このような緑化の遷移に関する話題も非常に興味深いのですが、今回は、緑化による表面侵食防止に関する話題について進めていきたいと思います。

1970年代以前に行われていた緑化と表面侵食防止の研究は、大きく分けると3つに分類できます。

1 つめは植被率と侵食の関係を整理した試験です。具体的には植物を播種して、野外に放置または降雨試験などを実施し、対策工を行わない状態と比較するという試験です。

2 つめは、森林内のリター等の堆積物にならって被覆物を設置し侵食量の関係を整理した試験です。網状のネットやシート状の素材を設置し、野外に放置または降雨試験などを実施し、対策工を行わない状態と比較しています。

3 つめは侵食防止剤の効果確認試験です。植生が成立しない期間に地表面の侵食を防止することを防ぐため、地山面に糊のような物質を直接散布して効果を確認、対策を行わない状態と比較しています。また、斜面上に種子等を流されないように保持するために使う資材として、種子の発芽への影響などを調べた試験です。

植被率と侵食を調べた試験

1 つめは植物をできる限り早く生育させ、斜面を被覆することで侵食を防止しようとするものです。発芽までの期間が短く、確実に発芽し、素早く生育するといった特徴を持つ外来牧草草本をどの程度の密度で播種すれば、効率的・経済的に被覆できるということを試験しています。

古くは緑化工概論⁴⁾に記したもので、傾斜30度の模擬斜面において、異なる植栽密度でクリーピングレッドフェスクを草植した後に、降雨強度210 mm/hにて1時間の人工降雨試験を行っています。結果は、密度が高いすなわち植被率が高いほど流出土砂量が少なく、植被率100%では流出土砂量は0%と報告されています。この試験内容については、その出典が不明瞭ですが、土壌侵蝕に関する研究集録⁶⁾に同様の内容が記載されています。

小橋ら³⁾による報告では、関東ロームの上にケンタッキー31フェスクを播種し、播種後20日程度経過した数センチの芝草(被覆は非常に低い)の状態でも人工降雨試験機の雨量強度30, 60, 90 mm/hの条件で30分間降雨させた後、土砂流出土量を測定(図-2)しています。結果は、芝草がごく小さい時点(施工後15~20日の幼植物期)でも相当な効果があると報告されています。

岩川⁷⁾は叢生中型のイネ科であるケンタッキー31フェスク、広葉直立型であるキク科のヨモギ、初期生育の早いニセアカシアを用い試験を行っています。発生期待本数を3段階にかえ降雨実験は経過日数10日後から10日間隔に実施しています。結果は流出土砂量と生育量(乾燥重量)の関係としてまとめられており(図-3)、試験時の植被率の記載はありませんでした。ケンタッキー31フェスクは初期から成長が早く、重量成長も多く、伸長した細長い葉は降雨の継続につれて倒伏したが、かえって地表に密着したとの記述があります。ヨモギは発生初期がほかの2種に比べて苗高、重量ともいちじるしく小さいが、30日ご

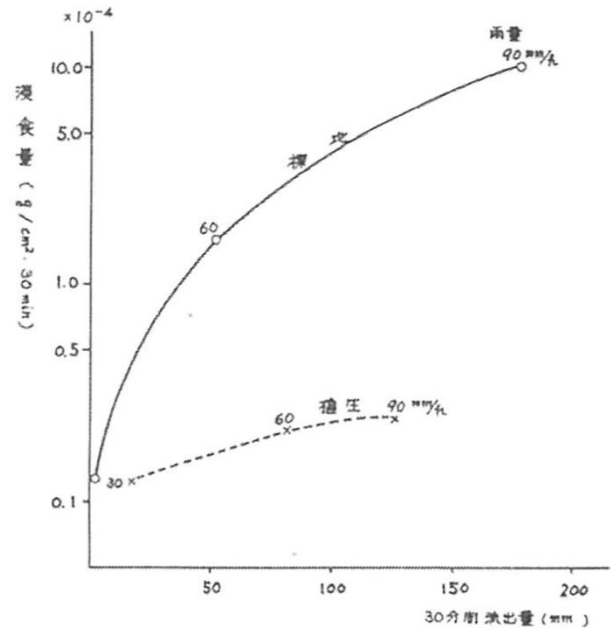


図5-1 30分間の侵食量

図-2 30分間の降雨試験後の裸地と植生の侵食量の違い³⁾

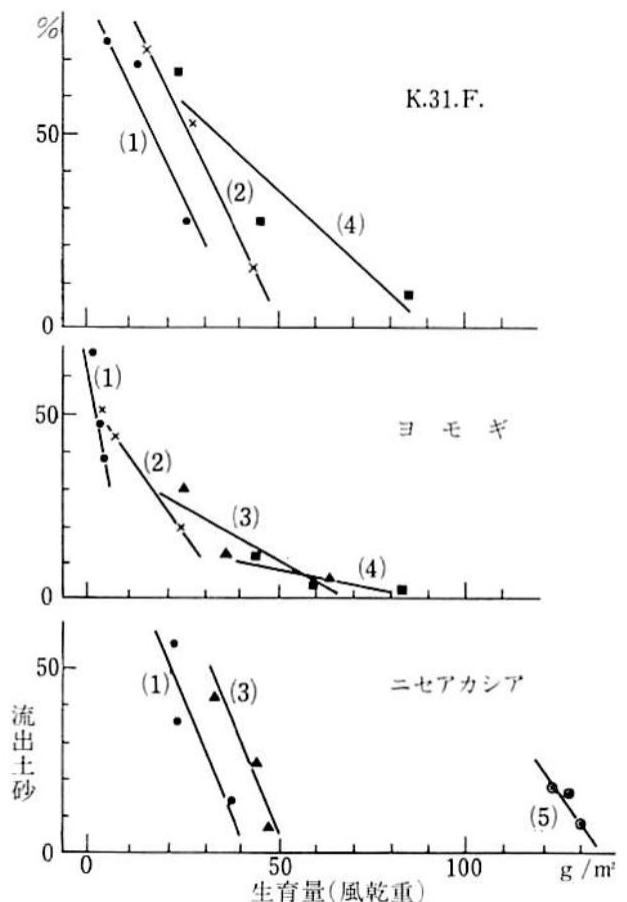


図-4 経過日数別の流出土砂量
(1)10日目, (2)20日目, (5)50日目

図-3 経過日数別の流出土砂量⁷⁾

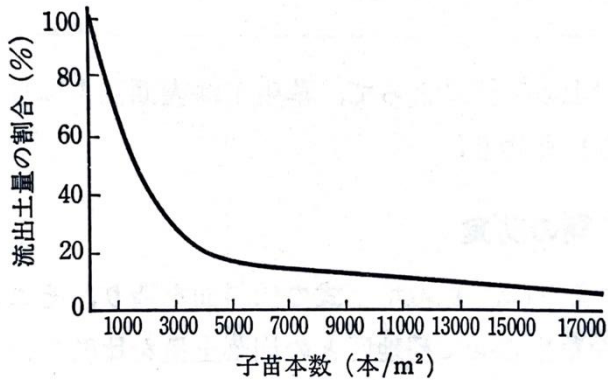


図-4 K31Fの子苗本数と流出土砂量の関係¹¹⁾

ろ以降には生育が旺盛となり、広葉が伸長するに従って被覆も密になり、降雨の継続によって倒伏しても、地表は密に被覆された状態と記述されています。30日以降では、施工時の発生期待本数にかかわらずケンタッキー31フェスク以上に流出土砂量が少ないという結果を報告しています。一方、播種後10日後には発生期待本数10,000本と予想されるプロットの流出土砂量を比較すると明らかにケンタッキー31フェスクが少ないことから、ごく初期には外来草本を高密度で播種する効果が確認できます。

山寺¹¹⁾は、ケンタッキー31フェスクの子苗4cmについて、傾斜45度、自然降雨88.1mm(5回合計)で実験した結果(図-4)、3,000本/m²では侵食量が裸地の1/5となり、これ以上増えても流出土量はそれほど減らないことを証明しています。この試験内容の出典元は不明です。

まとめ

これらの試験結果から、植物の種類は問わず地被物で十分覆われた時の表面侵食防止効果は十分で、異常な集中水がある場合以外侵食を受けることはない。とまとめることができます。また、条件さえ整えば、播種後2週間ほどで一定以上の植被率が確保できる植物の利用が、侵食防止には有効です。なお、被覆にいたる期間は短ければ短いほどよく、こういったことが容易実現できる外来草本類は表面侵食防止効果が絶大にあると言えます。

今から半世紀以上前に、常識とされていることですが、発芽率が低い、一定ではない在来種のための播種や生育の遅い木本植物のみを播種するといった緑化では、外来種と同様の表面侵食防止効果を期待することはできません。そのためには、裸地の期間侵食されないマットなどのマルチング機能の向上や、種子を含む基盤を流亡されにくい状態かつ発芽生育する状態に保つ必要があるのです。この半世紀の間に、法面緑化技術者が多くの技術を開発し対応しています。種子を変えるだけで、何でも生えるわけではないのです。裸地のまま冬を越せるわけではないのです。

この辺にしておきましょう。居酒屋の閉店の時間が迫っているようです。これ以上書くとわたしより年配の技術者に絡まれそうです。2つめの被覆物と侵食の関係や、3つめの侵食防止材の効果についてはまたの機会に。次があるか、無くなって本当の居酒屋でのみお話しすることになるのかはコミュニケーション(反応)が活発かどうかにかかっています。応援いただける方は「いいね!」ボタンはないので、メールにてご意見いただければ幸いです。ボツになったら、学会の時にでも本当の居酒屋にお誘いいただければ喜んでお話しさせていただきます。その時はもっと毒舌ですけど(^_^)。

最後に、参考文献の中から国会図書館のデジタルコレクションやJ-STAGE、Google Scholarなどで見つけ出せないものは、10)と12)です。これ以外はネット検索や国会図書館に利用者登録すれば遠隔地からでも見ることができます。2025年度の大会は京都なので、関西館に足を伸ばして会員登録&博士論文を読んでしまうのも楽しいかと思います。「巨人の肩の上に立つ」そんな体験をあなたもしてみませんか?

参考資料

- 1) 川口武雄・滝口喜代志(1957) 山地土壌侵食の研究(第3報) 地被物の侵食防止機能に関する実験, 林業試験場研究報告, 95: 95-124.
- 2) 北原 曜(2002) 植生の表面侵食防止機能, 新砂防, 54(5): 92-101.
- 3) 小橋澄治・坂崎和夫・黒沢 章・草野国重(1974) 斜面の雨水浸食防止の研究, 鉄道技術研究報告, 886: 1-75.
- 4) 倉田益二郎(1959) 緑化工概論: 治山砂防・草木増植, 養賢堂 259 pp.
- 5) 倉田益二郎(1979) 緑化工技術, 森北出版, 298 pp.
- 6) 倉田益二郎(1958) 土壌崩落防止の研究(第1報), 土壌侵蝕に関する研究集録 第3(農業土木資料;第9), 農林省振興局研究部, 159-162.
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2492432>
- 7) 岩川幹夫・原 敏男(1975) 緑化初期の植物被覆量と表面保護効果の実験, 第85回日本林学会大会講演集, 282-283.
- 8) 村井 宏・岩崎勇作(1975) 林地の水および土壌保全機能に関する研究(1)森林状態の差異が地表流下, 浸透および侵食に及ぼす影響, 林業試験場研究報告, 274: 23-84.
- 9) 新田伸三(1979) 緑化工発達史, 緑化工技術, 6(2): 3-6.
- 10) 新田伸三 緑化工戦後50年(1995) 緑化工のあゆみ 創立30周年記念出版, 日本緑化工協会, pp. 16-31.
- 11) 山寺喜成(1979) 緑化工技術, 倉田益二郎著, 森北出版, pp. 102-104.
- 12) 山寺喜成(1990) 急勾配斜面における緑化工技術の改善に関する実験的研究, 全国特定のり面保護協会, pp 274-280.
- 13) 吉田博宣(1982) 斜面緑化, 小橋澄治・吉田博宣・森本幸裕著, 四手井綱英編, 鹿島出版会, pp 178-206.

研究ノート Research Note

現地検討会「能登半島地震による影響と自然再生」(1) 実施報告

中村華子

金沢大学 先端科学・社会共創推進機構 (能登学舎)

／企画・事業部会 (hana-nakamura@staff.kanazawa-u.ac.jp)

2025年1月12日から14日に現地検討会「能登半島地震による影響と自然再生」(1)を開催致しました。実は2024年秋季に予定していたのですが奥能登豪雨の影響により実施を延期していました。積雪期の開催は難しいことも考えられましたが、参加者のご協力により無事に開催することができました。ご参加のみなさま、関係各位に感謝申し上げます。

「能登の里山里海」は2011年に世界農業遺産に認定されました。三方を海に囲まれた能登半島は、海、川、平地、山地の隔たりが小さく、それらのつながりを感じやすい地域性を有します。縄文時代(以降)の遺跡が数多く分布しており、中には4,000年間継続した集落があるなど、長い期間、人々や生き物がともに暮らしてきた地域でもあります。石川県では、1970年まで本州最後の生息地として能登半島に生息していたトキを、生物多様性の保全や里山里海の利用保全の推進に向けたシンボルとし、「トキが生育する地域づくり」をスローガンに掲げています。それらの取り組みが着実に進む一方で、度重なる自然災害の影響も受けてきました。とりわけ2024年は令和6年能登半島地震、さらに9月の令和6年奥能登豪雨で大きな影響を受けました。今回の現地検討会は、2024年の地震や豪雨による地形改変、影響を現地で視察し、これからの復興、地域再生、自然再生に向けた意見交換を行うために企画致しました。表-1に主な見学地を記載します。案内の内容は学会ウェブサイトもご参照ください。

現地検討会「能登半島地震による影響と自然再生」

https://www.jsrt.jp/excursion/20250112-14_noto.html

表-1 日程と主な見学地

- 1月12日 三井地区の仮設団地、輪島市街地 鳳至川中流域 白米千枚田 名舟港
 1月13日 鶴飼港、見附島周辺～飯田港 宝立地区の仮設団地 珠洲市外浦地域 塩田 町野川河口～町野市街地・鈴屋川 輪島市トキ生育環境整備モデル事業地
 1月14日 能登町農業法人、石川県奥能登農林事務所(農地視察、意見交換)

いくつかの応急仮設住宅を見学させて頂きました。手代木純氏(金沢工業大学)から、自治体ごとに住宅の様子が様々あること、入居者の配置への工夫、そもそも立地に制限のある中、施設配置などで様々な工夫があったことなどが説明されました(写真-1, 2)。石川県では、従来よく見られるプレハブ型に加えて、木造、ユニットハウス、トレーラーハウスなどが利用されています。木造の仮設住宅については、熊本

地震をモデルにした「まちづくり型」と、みなし仮設住宅で生活する方が地元に戻る「ふるさと回帰型」が整備されています。写真-2は公園に設置された住宅です。このように公園やオープンスペースに整備された住宅が使用され続ける場合、住宅地としての転用となる可能性があります。将来のビジョンや再整備を視野に入れた検討、柔軟な対応が望まれます。



写真-1 輪島市三井地区のまちづくり型住宅



写真-2 芝生や植え込みのある公園に整備された珠洲市見附公園の木造住宅

写真-2の住宅は、木造による応急仮設住宅です(坂茂建築設計ほか)。DLTとよばれる木材同士に木ダボを貫通させたパネルを箱型にして千鳥に積んで短期間での建設を実現しています。2024年度のウッドデザイン賞最優秀賞(国土交通大臣賞)を受賞しました。坂茂建築設計+NPO法人ボランティア・アーキテツ・ネットワーク(VAN)では能登瓦回収プロジェクトも行っています。能登瓦は現在生産されておらず、

貴重な資源として再利用することが望まれています。

写真-3 は輪島市町野町のトキ生育環境整備のモデル事業地です。上野裕介氏（石川県立大学）から、トキの餌となる生き物を保全する取り組み、営巣地として想定される山林の保全に関する取り組みが説明されました。能登地域では2026年度にトキの放鳥が行われ、野生復帰事業が展開されることが決定しています。

奥能登地域で最大の流域面積を持つ町野川の流域では地震による地すべり、崖崩れなどが多数発生しました。そして、9月の奥能登豪雨で多くの土砂等が流出しました。町野川河口では隆起の影響も大きく、堆積した土砂により河口の流れが変わりました。さらに今後の変化が注目されます(写真-4)。



写真-3 輪島市町野地区のモデル事業地区



写真-4 多くの土砂が堆積している町野川河口

能登半島は、半島の先端となる珠洲市の狼煙地区を境に、日本海に面した北～西側を外浦、富山湾側を内浦と呼びます。奥能登地域外浦の海岸の背後には地すべり地形が卓越する能登山地が位置します。その地形や地質を利用して多くの棚田や塩田が作られ、営まれてきました。海岸付近で見られる特徴的な地すべり地形を観察しました。観光名所として知られる白米千枚田もそうした水田の一つです。

石川県奥能登農林総合事務所では、森林部担当者から地震や豪雨に対する取り組みを、また、企画調整室／いしかわ農業総合支援機構担当者からトキの放鳥に向けた取り組みを伺いました(写真-5)。地域の住民にはトキが生息していたことを知っている方も多いようで、トキをシンボルにした石川県の取り組みの有効性を感じました。



写真-5 奥能登農林事務所での意見交換会



写真-6 緑化に使用する地域性種苗の確保に向けた意見交換

能登町内浦地区では地域の農業法人と、緑化資材の生産可能性について意見交換を行いました(写真-6)。日本緑化工学会では、自然環境に配慮すべき地域を中心に、地域性種苗(ある地域内から採取、育成した種苗)の活用を進めています。地域の種を地域で生産し、地域の事業者が地域の緑化工事を実施することを目指した活動について、将来の可能性や方向性について意見交換を行いました。能登半島では耕作放棄地や休耕田・畑があり、さらに地震の影響で土地を離れている耕作者も多くなっています。条件によってはそのような場所を種苗の生産(採取)に活用できる可能性があります。

能登半島では復興に向け、また持続的な地域経済の構築に向け、今後も様々な取り組みが進められていくと考えられます。学会員各位、そのほかの方々と、さらなる議論、検討を進められることを期待しています。今回ご一緒頂いた学会員の皆様、ご案内頂いた皆様ありがとうございます。再掲となりますが、改めて御礼申し上げます。

なお、本稿を皮切りに、現地検討会の参加者等による能登半島関連コラムを連載していく予定です。ご期待下さい。

参考資料

- 1) 一般社団法人日本ウッドデザイン協会. "ウッドデザイン賞 受賞作品データベース". <https://www.wooddesign.jp/db/production/year/2024/> (参照: 2025年4月17日)

緑地探訪 柏崎松波海岸の人工砂丘（新潟県柏崎市）

今富有紀

グリーン産業株式会社 (imatomi-yuki@green-s.co.jp)

新潟県柏崎市松波海岸は、日本海に面し、飛砂や暴風、塩害などの被害に長年悩まされてきた。昭和 30 年頃、この地域のクロマツ林が飛砂防備保安林に指定され、治山事業により人工砂丘の造成やクロマツを主とした植栽や保育が進められ被害軽減が図られた。当初、牧草を用いた法面保護が行われたが、衰退に伴う侵食や砂丘の決壊が生じた。しかし同じ環境でハマヒルガオなどの在来海浜植物が法面に定着する様子が観察されたことから⁴⁾、当地区では海浜植物の特性を生かした緑化誘導工が採用されるようになった。

平成 28 年から令和元年までの 4 箇年、人工砂丘の再造成が行われた際に、埋設型砂地緑化マットと砂丘表土を活用した緑化工が行われた。私は法面状況や生育状況を確認するために定期的に現地を訪れた¹⁾。施工後の生育状況は、概ねの傾向として、始めの 2 年程度はメヒシバやメマツヨイグサの 1~2 年草が優占し、その後 2~3 年でハマヒルガオやコウボウムギなどの多年生の海浜植物が主体となる植生に変化した。元々この砂丘に生育していたハマゴウやウンランも、多数再生した。人工砂丘の風下側にあたる内陸側斜面は、海側や天端部に比べ、堆砂の影響を受けやすく緑化の難度が高い。

令和 5 年に行われた調査²⁾より、施工から 4 年~7 年が経過しても 5 割を超える植被率が継続しており砂丘は安定している。ハマヒルガオ、コウボウムギの他に、ケカモノハシやハマニンニク、ハマニガナなど主要な海浜植物³⁾ 9~10 種

が生育しており、それらが複雑に混在しながら砂丘の個性的な景観を作り出している。またこの事業によりハマボウフウが劇的に増えたことは地域住民の間で知られており、その利用可能性に期待を寄せているようである。

砂丘表土を活用した緑化工はまだ数少ない取り組みであるが、自然の回復力（レジリエンス）を引き出し、短期的に砂丘生態系の基盤種を形成しかつ砂丘地形の安定化を発揮するなど多面的な可能性を秘めている。

引用文献

- 1) 今富有紀・藤塚治義 (2017) 新潟県柏崎海岸の土塁工への現地表土を用いた海浜植生の復元, 平成 29 年度日本海岸林学会大会研究発表会要旨集, 35pp
- 2) 環境省 (2024) 令和 5 年度環境技術実証事業実証報告書, 実証番号 140-2301, 環境技術実証事業ウェブサイト, <https://www.env.go.jp/policy/etv/index.html> (参照: 2025 年 3 月 31 日)
- 3) 澤田佳宏・中西弘樹・押田佳子・服部保 (2007) 日本の海岸植物チェックリスト. 人と自然 No.17, 85-101
- 4) 山田 茜 (2020) 新潟県柏崎市松波地区における在来植物を用いた人工砂丘の緑化について, 第 60 回治山研究発表会研究発表論文集(web)



写真左上：上空から臨む松波海岸の人工砂丘と松林。写真右：6 月の砂丘植生，ハマヒルガオやハマボウフウが開花，多年生の海浜植物がモザイク状に生育。写真下左：ウンランと訪花昆虫。写真下中央：5 割を超える植被で砂丘は安定している。

緑地探訪 都市緑地と生物多様性（大手町の森）

梶川昭則

東邦レオ株式会社 (kajikawa@toho-leo.co.jp)

都市緑地におけるグリーンインフラ（以降 GI）の推進は、今では広く知られるようになってきた。GIには様々な機能があり、微気象改善、カーボンニュートラルへの対応、CO₂の削減、雨水貯留浸透効果、ウェルビーイングなど、その評価手法に関してもある程度定まってきたと思われる。しかし、GI機能の1つである生物多様性に関しては、様々な取り組みは行われてきているが、評価手法はこれからの状態と考えられる。

京都大学の森本幸裕名誉教授¹⁾が、生物多様性について次のように述べられている。生物多様性は、生物学的な自然環境の要素と構造の全体像を示す言葉であるが、地球環境の持続可能性の大きな懸念材料として、生物多様性の危機が認められるようになり、ともすれば地球環境における希少種保護における機能のみ注目が集まる関心を、広く生物界全体へ、さらに地球環境における機能的な側面や生態系サービスの認識へと導く「革命」とも捉えられる。

生物多様性としては、損失をどれだけ食い止めてゆくかが重要なポイントとなるが、近年では都市開発、水質汚染、里山の減少、管理の縮小、外来種問題、化学物質の処理など、様々な問題が山積みの状態となっている。環境省では30by30目標²⁾を掲げ、陸と海の保全活動の推進を行っているが、保全地域以外での生物多様性に資する地域（OECM）も併行して力を入れている。

ここでは OECM に登録されている都市緑地として「大手町の森」³⁾を取り上げる。2013年9月に完成したもので、GI機能としては生物多様性効果に配慮した都市緑地として紹介したい。「大手町の森」とは、東京駅周辺に位置し、高度なビジ

ネス機能が集積する大手町に建設された大手町タワー（高さ200 m）の外構屋上緑化（人工地盤緑化）である。建築主は東京建物株式会社で、大成建設株式会社が建築設計、造園設計及び建築工事を行い、都市緑地としては内山緑地建設株式会社が手掛けたものである。約3600 m²の敷地への人工地盤緑化であるが、ここで行われた技術として特徴的なのが、「プレフォレスト」と言うものである。都市の中で失われつつある潜在自然植生を復元してゆくことを目的として、千葉県君津市にある内山緑地建設の圃場で3年間かけて作り上げた自然の森を、様々な検証試験を経て、ごっそりそのまま大手町に移植を行ったものである。高木樹186本、中低木約590本、地被植物約56,000本というもので、その中には自然界で見られる様々な生態的手法も用いられている。森林が豊富な地域であれば、目新しいものではないが、大都市の中にこれらのものを持ち込み維持管理して、アメニティ空間を形成しようとしていることは画期的と考えられる。現在竣工から11年を経ているが、都市緑地に即した維持管理の他、鳥・昆虫・草類のモニタリングも実施しており、様々な知見の集積がされていると思われる。都市における生物多様性を考慮した技術として「プレフォレスト」という考え方は、今後都市緑地でのスタンダードとして広まることを期待したい。

引用文献

- 1) 森本幸裕・亀山章編（2001）ミティゲーション - 自然環境の保全・復元技術、ソフトサイエンス社、354pp.
- 2) 環境省（2023）30by30に係る生物多様性の見える化手法検討会の報告：資料2-3
- 3) 公益財団法人都市緑化機構 緑化技術コンクール 第16回 環境大臣賞 屋上緑化部門 大手町の森



図-1 プレフォレストのイメージ³⁾



写真-1 現地に設置された「大手町の森」説明板

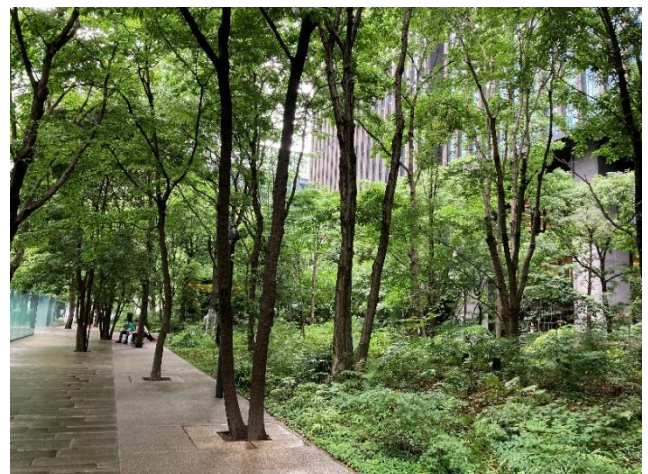


写真-2 都市のアメニティと生態的空間の共存



新 会員の自慢

緑豊かな武甲山を夢見て

小澤信彦 nobuhiko.ozawa@toko-geo.co.jp

東興ジオテック株式会社 (<https://www.toko-geo.co.jp/>)



1. はじめに

今回『新 会員の自慢』を担当させていただくことになりました。東興ジオテック株式会社技術本部技術開発部所属の小澤です。

本コラムは、会員自身の紹介をするといった趣旨ということで、前号で執筆した中村 剛様、そして編集委員長の岡 浩平先生から依頼があり、お引き受けすることにしました。

私は2015年に東興ジオテック株式会社へ入社し、今年の4月で勤続10年になりました。入社後の5年間は施工管理業務に従事し、2020年度に現在の技術本部へ着任しました。今は技術開発や独自緑化工法に関する問い合わせ対応・調査・検討が主な業務内容です。試験施工ではノズルを持つこともあります（冒頭の写真）。

検討案件については、地域を問わず全国で対応していますが、私が計画した現場はまだ施工に至っていません。今後、施工された際には、本誌へ投稿したいと思っています。

当学会へは、技術本部への着任以降から深く関わるようになり、斜面緑化研究部会第18期幹事として部会にも参画させていただいています。また、第50巻2号において、特集と技術報告で初めて学会投稿をしました。学術的な文章を書く難しさを痛感するとともに、自身のスキルアップのためにも続けていくことが重要だと感じています。

2. 東興ジオテックについて

弊社は、1956年にアメリカから輸入した吹付機を使用した吹付工事会社として設立されました。その後、吹付機を用いた種子吹付工法で緑化工事分野に進出し、1974年には無土壌岩石地の緑化を可能とした厚層基材吹付工（ON 吹付緑化工法）を日本で初めて施工しました²⁾。そして、国内産の在来木本植物を播種工で導入する「斜面樹林化工法」や国内産の在来草本植物を播種工で導入する「原風景緑化工法」を実用化し、国内産在来種子を中長期的に貯蔵可能な専用貯蔵施設「RSセンター」、休眠性の高い種子でも1週間前後で発芽力の検定が可能な「早期発芽力検定法」といった独自の技術によって、ネイチャーポジティブに貢献する法面緑化に長年取り組んできた会社です。そのほかにも、多様なニーズに対応する独自緑化工法を取り揃えています。詳細は弊社ホームページや第32巻3号、第37巻4号の「コラム・会員の自慢」を参照いただけたらと思います（学会HP下部のバナーから弊社HPにアクセスすることも可能です）。

3. 私の経歴について

まじめな内容はここまでにして、このコラムの趣旨である私自身のことをもう少し紹介させていただこうと思います。

私は埼玉県秩父市に生まれ、埼玉県立秩父農工科学高等学校森林科学科を卒業後、東京農業大学地域環境科学部森林総合科学科に進学し、治山緑化工学研究室で福永健司先生と橘隆一先生にご指導いただきました。

大学時代の卒業論文のテーマは、ジブチ共和国で採取した種子を用いた発芽・生育試験をしていました。学生的身ではありましたが、現地への種子採取に同行させていただき、大変貴重な経験をさせていただきました（写真-1）。橘先生とは今でも懇意にいただいています。

4. 林学・緑化工学に興味を持ったきっかけ

高校・大学と森林・林業について学んでいた私ですが、そのきっかけというのは、大工である父と、生まれ故郷の秩父の象徴ともいえる武甲山（写真-2）にあります。

父は、大工一筋50年になる根っからの職人です。今では地域を代表する大工となり、あちらこちらへと引っ張りだこのようです。幼い頃から木材に触れることが多く、小学校の夏休みの宿題などでは、父と共に木工作品を造っていました。木材や林業、樹木に興味を持ち始めたきっかけは父にあると思っています。

武甲山は、秩父市を象徴する鉱山で、今でも石灰の採掘が行われています。緑化工学に興味を持つきっかけとなったのが、この武甲山といっても過言ではありません。



写真-1 当時ジブチ共和国で採取した種子



写真-2 実家から撮影した武甲山

祖母の家には武甲山が開発される以前の写真が飾ってありました。祖母はその写真を見ながら、「昔のような自然豊かな山には二度と戻らない」と話をしていたことがありました。高校受験の際、その頃のことを思い出しながら「緑豊かな武甲山を見てみたい」「武甲山の自然回復に携わってみたい」と考えたことがきっかけで、林学を学べる高校への進学を決め、「緑化学」という分野を知りました。

そして、高校時代に福永健司先生や弊社社員が日本緑化工学会誌に投稿した論文・技術報告に触れ、東京農業大学へ進学し、現在に至っています。

5. 趣味や地元との関わり

岡 浩平先生からは、趣味等の内容でも構わないと伺っているため、趣味や地元との関わりについて触れたいと思います。趣味として、体力的に余裕がある休日は卓球をしています。

中学・高校と6年間卓球部に所属しており、30代になって著しい体力の低下と体型の変化に危機感を抱いたことをきっかけに卓球を再開しました(写真-3)。当時一緒に卓球をやってきたメンバーと団体戦に出場することもあります。

そして、地元との関わりについては、祭り行事に極力参加するようにしています。

秩父市には、毎年12月3日に「秩父夜祭」というお祭りが催されます。このお祭りは、日本三大曳山祭りの1つであり、2016年にはユネスコ無形文化遺産にも登録されました。

秩父夜祭は、秩父神社の神様と武甲山の神様が年に1度逢引きをするお祭りと言われており、起源は正確にわからないものの、現在の形で300年以上続いているそうです¹⁾。

施工管理業務に従事していたころ、埼玉県内の現場に就き、秩父出身であることを元請けの現場代理人に伝えると「夜祭の日は現場に来るな」と言われたことがありました。その代理人曰く、秩父の人間は夜祭が近づくと落ち着きがなくなり、事故が起こりやすいのだとか。私自身も夜祭が近づくと落ち着かない気持ちになるので、妙に納得してしまいます。それほど大切なお祭りなのだと思います。

2025年5月25日には、第75回全国植樹祭が秩父市で催されます。お祭りで曳き回される傘鉾・屋台が市内に飾り置きされるとのこと。ご興味のある方は、ぜひ足をお運び下さい。



写真-3 試合中の様子



写真-4 秩父夜祭の様子 下郷傘鉾と花火

6. おわりに

前回の中村 剛様との内容の落差に不安を感じていますが、このコラムを通じて地元愛に溢れた人間であると思っていたのであれば幸いです。

勤続10年を迎えたこのタイミングで、このコラムの執筆をできたことは、良いきっかけだったと思っており、自身が緑化学に興味を持つきっかけを振り返ることができました。

高校生の頃は、「武甲山に自然を戻したい」そんな漠然とした考えしか持てませんでした。今では「岩盤斜面でも緑化できる弊社の技術を駆使すれば、あの山全体を本来の姿に回復できるのではないか」と思えるようになりました。いつかは秩父(武甲山)の緑化に貢献できるよう精進するとともに、そのチャンスを掴み取る努力をしていきたいと思っています。

会員の皆様、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

参考資料

- 1) 観光庁. “地域観光資源の多言語解説文データベース” 国土交通省官公庁ホームページ. <https://www.mlit.go.jp/tagengo-db/R1-01213.html> (参照: 2025年4月1日).
- 2) 吉田 寛 (2024) わが国で初めて行われた厚層基材吹付工の試験施工地, 日本緑化工学会誌, 29(4): 532-540.

書 評 BOOK REVIEW

ウォーカブルなまちを評価する

一ノ瀬友博＋国際交通安全学会ウォーカブルなまち研究会編著、231頁、
定価 2,300円、発行：鹿島出版会 ISBN 978-4-306-07372-2

ウォーカブル（walkable）は、国土交通省が提示している「居心地がよく歩きたくなる」を意味し、歩く（walk）と、出来る（able）を組み合わせた造語である。本書は、このウォーカブルを視点に都市の在り方や都市に関わる様々な内容についての評価を国内外の事例を含めて書かれている。また、本書は研究調査のプロジェクトとして取り纏められており、その成果公表を示しつつ、理解しやすく書かれている。

本書は4つの章で構成され、まず第1章では、現在の都市の状況や在り方について、最近の事例を取り混ぜながら論じられている。COVID-19によって、日常生活自体の変革から、我々が日々当たり前に行動していた都市生活が、当たり前に行動が出来なくなったのは記憶に新しい。変わらざるを得なくなった都市の在り方を見つめ直すきっかけや、移動手段、健全な生活について記述されている。ウォーカブルによる町の形、つまり歩いて暮らせる都市とはどういった事なのかをこの章では、図を提示しながら丁寧に記述がされている。

第2章では事例として、欧米と日本における町をそれぞれ示し、説明がされている。欧州ではパリやウィーンなど、米国ではボストンやニューヨーク、日本では東京や島根などを事例に提示されている。欧州では、都市の歴史性からの成り立ちを踏まえ、道路自体を変えてまでのウォーカブルなまちへの社会実装についての説明、自動車などの交通を制約しての取り組みなど、歩行者と自転車中心とした実装について事例として丁寧に示されている。米国も同様で公園や緑地の歴史的成り立ちを活用した交通網のシステム、そこに人が歩きやすい空間の事例を示しており、大変分かりやすく書かれている。こういった活用やデザインの事例は、我が国でも活用できる内容で示唆に富んでいる。

日本でも東京丸の内での取り組みでは、ストレス評価のような科学的な点を視野に入れ、実験的に行われている点が大変興味深く、緑や熱環境、環境そのものの在り方、丸の内における街路公園化、すなわち street park の構築に向けた事例を示している事から、事例として参考になる取り組みと言えよう。島根県出雲市での神門通りの取り組みについても書かれており、ワークショップでの流れ、その後の整備の具体策、活用の仕方などその過程が分かりやすく示され、日本の街路整備に役立つと言える。本書に記述されていた丸の内、神門通りを私自身も個人的に実際見学してきたが、本書に示されている点が学べて大変勉強になった。

第3章では、実際に都市と街路における空間性の評価軸について図を交えながら説明がなされている。この評価については、自動車と歩行者にとっての関係性から、街路の在り方を示している点について、都市計画においても参考になる内



容といえる。加えて、街路分析、人流についてのデータの活用、様々な計測手法についての活用方法、AIを活用した分析や評価手法についてなど、その成果を示しながら記述がされている。ウォーカブルなまちについての視点の中で、土地取引の価格についての言及もあり、興味は尽きない。

身体的・精神的・社会的に良好な状態を示す言葉でもあるウェルビーイング（Well-being）については、都市の内外における緑化と健康について示し、ウォーカブルなまちの構築にあたっての健康につながる点が記述され、歩く事の大切さと地域ケアにも言及されており、内容が大変充実している。加えて、温熱環境といった実際に歩いて体感出来る内容についても、データを示しながら提示されており、今後の街路の在り方を考える内容として深く書かれている。

第4章では、以上を踏まえての討論方式での記述になっており、登壇者における説明、現場での生きた話の内容が読み取り、本書を纏める内容として大変興味深い討論会の議事録になっている。

本書は、関係する研究者にも読んで欲しいものではあるが、それ以上に業界や行政の担当者の方々に読んで頂き、活用して欲しいと思う書籍である。今後の都市をどう計画するのか、また都市をどう私たち利用者のために良くしていくのか、役立つと言え、是非一読するのをお勧めしたい書籍である。

福井 亘（京都府立大学大学院）

日本緑化工学会 第18期第8回理事会 議事録

日時：令和6年11月24日（日）13:05～15:30

場所：雪印種苗株式会社 東京本社（千葉県千葉市美浜区新港7-1）

出席者：高橋輝昌，岩崎 寛，築瀬知史，今井祥之，入山義久，内田泰三，大貫真樹子，岡 浩平，小野幸菜，倉本 宣，中村華子，福井 亘，松本 浩，眞見和樹，宗岡寿美（以上理事），吉崎真司（以上監事）

委任状提出：今西純一，上野裕介，小川泰浩，梶川昭則，田崎冬記，橘 隆一，田中 淳，辻 盛生，早坂大亮，三木直子，森川政人，森本淳子，山本 聡

第18期第7回理事会が令和6年9月11日（水）に開催され，以下の議題について審議された。

1. 役員人事

高橋会長より，田中監事が退任されることが報告され，今後，臨時総会にて氏の退任及び新しい監事の就任を会員に諮ることが了承された。新任人事を次回理事会までに会長，岩崎副会長，築瀬副会長を中心に協議することとし，併せて臨時総会の開催方法についても審議を予定する。

2. 会則及び制度の改定

2-1 会則改定

総務部会 内田理事より，先の令和6年通常総会にて改定が承認された日本緑化工学会会則（令和6年9月13日改定版）が示された。改定箇所を改めて確認した。

2-2 学生会員の特例制度

総務部会 内田理事より，先の第7回理事会にて意見があがった「学生会員新規入会者の特例制度」の説明文変更について文章案が示され，承認された。日本緑化工学会ホームページ（以下，HPとする）等の関連部分も変更する。また，日本緑化工学会ニュースメール（以下，NMとする）でも会員に変更の旨を通知する。

3. 学術情報に関する外部組織との契約について

3-1 日本農学会への入会申請

高橋会長より，今年度総会で承認された，（一社）日本農学会への入会手続きを行っていることが報告され，承認された。2025年4月より入会予定であり，学会内の担当者として，会長及び研究部門長（岩崎副会長）が就任した。また，初代の運営委員として中村理事が会長より指名され，承認された。

3-2 EBSCOhost への日本緑化工学会誌の収録

総務部会 内田理事より，EBSCO 社（EBSCO Information Services，米国）の学術情報サービス：EBSCOhost（エブスコホスト）への日本緑化工学会誌の収録（学術論文データベースへの情報提供）について提案と説明があり，承認された。収録に関して費用や作業は発生せず，EBSCO 社と契約提携後，先方にて学会誌の収録作業，J-Stage からの論文データ取得が開始される。国内の多くの学会も登録しており，今後の論文引用数や投稿数の増加を期待する。

[備考] EBSCOhost は，世界の学術論文，記事等の学術情報を出版社や学術雑誌を横断して検索し，検索された論文の全文，抄録を印刷，保存，メール送信できるオンラインデータベース。475種類以上の学問分野について情報提供ができる。国内外の17,000社以上の出版社，学協会と契約し，世界の約9割の大学図書館，研究機関が利用している。なお，著作権は発行元（出版社，学協会）に帰属する。

3-3 学術著作権協会との AI 利用に係る権利の委託追加について

総務部会 内田理事より、(一社)学術著作権協会の契約約款が改定され、著作物利用形態に「AI 利用(著作物を AI による機械学習や、学習した AI による生成物の生成)」の追加と、AI 利用に係る権利の委託が新たに付け加えられたことが説明された。改定された契約約款にて更新契約することが承認された。

4. 学会大会

4-1 第 56 回日本緑化工学会大会 (2025 年京都大会)

第 56 回日本緑化工学会大会運営委員会 福井理事(運営委員長 今西理事代理)より、大会案内が報告され、現在のところの大会概要及び予算計画が周知、確認された。今後、大会運営委員会と経理部会(大会参加費の入金確認、領収書発行、参加者名簿作成、大会口座の引継ぎ等)、及び編集委員会(大会特集号に受理された論文、技術報告の発表形式、優秀ポスター賞の応募有無に関する情報共有)、企画事業部会(CPD 関連の手続き)などと連携して運営に当たることが話し合われた。引き続き大会運営委員会にて、施設関連、会費の検討を進める。

4-2 ELR 大会の開催

高橋会長より、次回の ELR 大会(約 5 年ごとに開催計画される、応用生態工学会、日本景観生態学会、日本緑化工学会の 3 学会合同大会)の開催年を 2027 年とすることを、両学会に提案することが報告、承認された。次回の ELR 大会は当学会が幹事学会であり、早い時期からの準備が必要と周知され、学術国際交流部会にて他学会との連絡、調整を担当することとなった。

5. 災害対応

5-1 災害対応委員会(仮称)の創設

高橋会長より、災害発生時の当学会としての対応を検討する組織として、「災害対応委員会」(常設委員会)を設立することが提案され、承認された。構成は、会長、副会長と、事業、研究各部門の部会長とし、必要に応じて会長が招集する。また、常設組織となるため会則改定(組織の追加)が必要となり、総会に諮ることが了承された。

5-2 災害復興支援委員会(仮称)の設立

高橋会長より、大規模災害への当学会としての復興支援について検討する組織として、「災害復興支援委員会」(災害発生時に立ち上げる臨時委員会)を設置することが提案され、承認された。「災害対応委員会」の下部組織として、災害のケースに応じて委員会を設立する。構成員は広く会員から公募する。設立の担当理事として、上野理事が会長より指名され、承認された。

委員会では、当学会としての災害復興支援のイメージを現地視察、調査実施を通じて具体化(何に取り組むべきかの明確化)し、以降の支援活動の基礎となる指針を策定、公表することを成果目的として活動する。また、災害復興は長期に継続されるので、対策後のモニタリングや新たに発生する課題への対応も検討できるとよいとの提案もあった。

5-3 能登震災復興への支援活動

企画・事業部会 中村理事より、延期となっていた能登半島地震の復興支援のための現地検討会を 2025 年 1 月 12 日(日)~14 日(火)に開催することが案内、承認された。検討会の名称は「能登半島地震による影響と自然再生」とし、今回を初回として今後複数回にわたり開催する。担当は上野理事、中村理事。

6. デジタル改革ワーキンググループの活動

6-1 学会ホームページ作業

デジタル改革ワーキンググループ（以下、WG とする。）HP 担当 小野理事（主担当 辻理事代理）より、学会 HP 作業の進捗状況の報告とともに、学会のインターネットツールの構成、認識について、以下が周知された。

- ①本部サイト（HP）の管理：総務部会（管理代表者として総務部会長（内田理事））
- ②各部会のページ管理（委員会の事業内容紹介、記事更新、ブログなど）：各部会・委員会の担当理事（更新時に総務部会に連絡、以下、更新に関しては同じ）
- ③広告バナー及びコミュニティレター（以下、CL とする）の広告について 広告主との折衝：デジタル改革 WG 広告担当（田中淳理事）、管理責任者：岩崎副会長、築瀬副会長、更新管理：総務部会
- ④会員管理（入退会の登録、変更） 新フォームとなり、管理を学会事務局へ委託。
- ⑤学会誌管理について 新フォームにアーカイブを保存中。当サイトは編集部会にて更新内容を検討し、デジタル改革 WG HP 担当が更新する。
- ⑥CL サイトについて 新フォームを作成済みで、現在試行版を掲載中。CL は PDF 掲載で、CL 内のトピック記事を抜き出して掲載することも可能。CL 担当（今年度は編集部会が担当）にて PDF 原稿を準備し、デジタル改革 WG HP 担当が更新する。

また、今後の HP への学会誌 PDF の掲載については、J-Stage 掲載だけでなく、第 50 巻 1 号（大会号）のように表紙、目次、奥付を付ける方が利便性がよい、著作権者として PDF を維持する必要性がある、との意見があり、学会誌の PDF 化を外部委託した場合の見積（大会号のみと、大会号に加え通常号も PDF を維持する 2 パターン）を編集部会で収集し、別途メール審議することとなった。

なお、理事の負担軽減のため、HP 更新作業をすべて外注することも話し合われ、デジタル改革 WG HP 担当と総務部会で、委託内容、委託先の検討、見積収集を行うこととなった。

6-2 企業広告

デジタル改革 WG 広告担当 田中淳理事（代理で総務部会 大貫理事が代読）より、現在の企業広告の申し込み状況（広告種類、サイズ他）及び見込み広告収入額が報告され、承認された。また、一括、4 回分割払い（各社で選択）の請求作業の時期について、今後、全納が 2 月、分納（4 回）は 11、2、5、8 月とし、現在分納の第 1 回目を請求中との報告があった。

7. 各部会報告・連絡

7-1 学会誌の編集（編集部会）

1) コミュニティレターの編集状況

編集部会 岡理事より、現在編集中の CL の編集状況、記事内容が報告された。今回編集号を創刊号とし、内容が報告され、承認された。今年度の CL は編集部会で担当し、構想として、1) 会員交流の場（読みやすい内容）として機能させたい、2) CL 編集委員長、担当委員を置くことを検討したい、3) 年 3 号を発行予定（発行月と号数の表記は未定、次回理事会で検討）とし、大会開催の 9 月発行号は研究交流会要旨集掲載号とする、との提案があった。

2) 学会誌の編集状況

編集部会 岡理事より、学会誌の編集状況が報告された。現在、論文 6 編、技術報告 3 編を審査中、また、第 50 巻 2 号（J-Stage, 2024 年 12 月）以降の内容について以下の予定であることが報告された。①第 50 巻 2 号：総説 1 編、論文 4 編、技術報告 1 編、英文誌 LEE ナビ（LEE 掲載原稿の紹介）1 編を掲載。②第 50 巻 3 号：特集「OECM で生きる！ 現行自然共生サイトの現状と新制度」（2024 年大会研究集会）、③第 50 巻 4 号：特集「ヒトが生み出し・つなぐ Tokyo のみどり」（2024 年大会シンポジウム）

7-2 会員の入退会と管理（総務部会）

総務部会 内田理事から、令和 6 年 9 月 1 日～令和 6 年 10 月 31 日の会員の異動が報告され、承認された。学生会員から正会員へ種別変更し、会員を継続する者が 1 名あった。

7-3 経理及び収支状況（経理部会）

1) 収支状況の報告

経理部会 入山理事から、令和 6 年 11 月現在の収支報告について説明され、収支が問題なく運営できていることが報告された。

2) 会費未納による負債対策の状況

経理部会 築瀬副会長より、現在の会費未納による負債状況について、氏名と未納額を対応した名簿リストが示された。詳細な会費徴収の状況が説明され、回収率が 8 割未満であることが報告された。今後、早急に負債を解消するために、2 年以上の会費滞納者は、会費 2 年分の支払いの上で退会とする提案が示され、承認された。また、リスト掲載者からの会費納入については雑収入として計上すること、負債額について収支に記載していくことも提案され、了承された。

3) 会費請求書の郵送希望者への対応

現在、会費振込みは会員が各自おこなっているが、請求書を郵送希望の会員が数名おり、築瀬副会長から、郵送対応は来年度から作業手数料を徴収してはどうかとの提案があり、承認された。

7-4 企画行事（企画・事業部会）

企画・事業部会 中村理事、松本理事より、今年度以降の報告と活動予定が報告された。

1) 緑化工セミナー（担当：松本理事、倉本理事）

- ・第 3 回（2024 年 8 月 26 日(月) 開催）：「都市域の緑化空間における生物多様性」

話題提供 宮本脩詩氏、高林 裕氏 CPD ポイント：3

- ・今後の予定 第 4 回を 2025 年 1 月に開催予定、以後数か月に 1 回程度開催。

講義予定者：宮崎直美氏、阿部健太氏、西野文貴氏、小川泰浩氏、中島宏明氏

- ・開催するセミナーについては、基本的に CPD ポイントを付与する。CPD 担当（辻理事、小野理事、石垣氏）に申請を依頼する。

2) 現地検討会「能登半島地震による影響と自然再生」（複数回の開催を予定）について（5-3 に関連。）

- ・担当 上野理事、中村理事

- ・第 1 回：2025 年 1 月 12 日(日)～14 日(火)

12, 13 日は現地見学会、14 日は現地農業法人との種苗調達ワークショップを予定する。

- ・第 2 回：同 3～4 月に予定。

7-5 ICLEE2024 大会の報告（ICLEE 大会 日本緑化工学会実行委員会）

ICLEE2024 大会 日本緑化工学会実行委員会 森本理事（代理で総務部会 内田理事が代読）より、2024 年 10 月 4 日(金)～6 日(日)に開催された ICLEE2024 大会（ICLEE 設立 20 周年記念大会）の報告があった。参加人数は 179 名、発表件数 167 件（うち、当学会会員の発表は 24 件）と盛況であったことが報告された。

なお、大会を終えたことから、当委員会を解散することが了承された。

（以上）

会員の異動

(令和6年11月 1日～令和7年1月31日)

《入会》	正会員	3名
氏名	勤務先	
黒岩 洋一	清水建設株式会社	
山口 美知子		
斎藤 達也	熊本県立大学	

《入会》	学生会員	7名
氏名	勤務先	
出口 敬涼	北海道大学大学院	
福島 龍星	中央大学	
南方 政人	中央大学	
長井 智哉	中央大学	
銭谷 卓人	千葉大学大学院	
堀田 夢起	中央大学	
安 愛美	京都大学大学院	

《退会》	正会員	7名
池本 省吾(鳥取県農林総合研究所),阿部 佑平,田中 章,上小牧 駿,譚 瀟洋,安田 卓宏(日比谷アメニス),山田 守		

《退会》	学生会員	4名
生亀 正照(首都大学東京大学院),鈴木 雄樹(東京都市大学),東 建介(福井県立大学大学院),友口 勇生(九州産業大学大学院)		

賛 助 会 員

2024年11月11日現在

団 体 名	〒	所 在 地 URL	TEL FAX
会津法面（株）	967-0600	福島県南会津郡南会津町山口字欠河原 1784	0241-72-2624
（有）アルファグリーン	231-0023	神奈川県横浜市中区山下町 99-1-207 http://www.a-green.org	045-650-5360 045-650-5365
（株）大林組技術研究所	204-8558	東京都清瀬市下清戸 4-640 http://www.obayashi.co.jp/	042-495-1111 042-495-0901
（一社）街路樹診断協会	108-0074	東京都港区高輪 3-4-1 高輪偕成ビル 8階 http://www.gaishin.com	03-6447-7288 03-6450-2274
鹿島建設（株）技術研究所	182-0036	東京都調布市飛田給 2-19-1 http://www.kajima.co.jp/	042-485-1111 042-488-3394
（株）KANSO テクノス	541-0052	大阪府大阪市中央区安土町 1-3-5 http://www.kanso.co.jp/	06-6263-7320 06-6263-7321
共和コンクリート工業（株）	061-1405	北海道恵庭市戸磯 385-36 http://www.kyowa-concrete.co.jp/	0123-34-3366 0123-34-3369
グリーンキャスター事業協同組合	930-0094	富山県富山市安住町 3-14 富山県建設センター1F	076-442-5300 076-442-5322
栗田工業（株）	164-0001	東京都中野区中野 4-10-1 中野セントラルパークイースト http://www.kurita.co.jp/	03-6743-5000
（株）ケイエフ	590-0021	大阪府堺市堺区北三国ヶ丘町 8-7-7 http://www.norimen.com/	072-232-6060 072-232-6008
小岩井農牧（株）	020-0507	岩手県岩手郡雫石町 26 地割字丸谷地 36-1 http://www.koiwai.co.jp/	0196-92-3148 0196-92-3159
小岩金網（株）	111-0035	東京都台東区西浅草 3-20-14 http://www.koiwa.co.jp/	03-5828-8828 03-5828-7693
（株）構研エンジニアリング	060-0034	札幌市中央区北 4 条東 4 丁目 1 番地 1 創成クロス https://www.koken-e.co.jp/company/	011-522-7682 011-522-7692
（株）高速道路総合技術研究所	520-3121	滋賀県湖南市西寺 1-1-1 緑化技術センター http://www.ri-nexco.co.jp	0748-77-2124 0748-77-4019
国土防災技術（株）	105-0001	東京都港区虎ノ門 3-18-5 青葉ビル 4F http://www.jce.co.jp/	03-3432-3567 03-3432-3576
サンスイ・ナビコ（株）	103-0025	東京都中央区日本橋茅場町 2-7-1 アソルティ日本橋茅場町 2F http://www.snse.co.jp/	03-5623-3600 03-5623-5554
上毛緑産工業（株）	370-3607	群馬県北群馬郡吉岡町大字小倉 827-87 http://www.jouryoku.com/	0279-54-7723 0279-54-8603
（株）新日本緑化	464-0850	愛知県名古屋千種区今池 2-1-18 http://www.sn-ryokka.co.jp/	052-732-2081 052-741-4175

賛 助 会 員

団 体 名	〒	所 在 地 URL	TEL
			FAX
(株) スペース・グリーン	580-0043	大阪府松原市阿保 5 丁目 7 番 25 号 https://spacegreen.co.jp/	072-331-1103 072-331-1180
(一社) 全国特定法面保護協会	105-0004	東京都港区新橋 5-7-12 丸石新橋ビル 3F http://www.norimen.or.jp/	03-3437-2588 03-3437-2566
大建工業 (株)	101-8950	東京都千代田区外神田 3-12-18 住友不動産秋葉原ビル	03-6271-7799 03-5296-4057
(株) 高特	377-0003	群馬県渋川市八木原 224-14 http://www.takatok.co.jp/	0279-22-2035 0279-23-3913
多機能フィルター (株)	744-0061	山口県下松市葉山 2-904-16 http://takino.co.jp	0833-46-4466 0833-46-4678
田中建設 (株)	034-0012	青森県十和田市東一番町 2-50 http://www.tanaka-net.co.jp	0176-23-3521 0176-25-7011
(株) タニガキ建工	640-0405	和歌山県紀の川市貴志川町岸宮 433 http://k-tanigaki.co.jp	0736-64-8989 0736-64-8889
東京パワーテクノロジー (株)	135-0061	東京都江東区豊洲 5-5-13 豊洲アーバンポイント http://www.tokyo-pt.co.jp/	03-6372-7125 03-6372-4162
東興ジオテック (株)	104-0061	東京都中央区銀座 7-12-7 高松建設ビル http://www.toko-geo.co.jp/	03-3456-8751 03-3456-8752
(株) 東平商会	411-0943	静岡県駿東郡長泉町下土狩 72-1 http://www.tohey.co.jp/	0559-86-8898 0559-87-0047
東邦レオ (株)	170-0004	東京都豊島区北大塚 1-15-5 http://www.toho-leo.co.jp	03-5907-5500 03-5907-5510
中日本ハイウェイ・エンジニア リング東京 (株)	160-0023	東京都新宿区西新宿 1-23-7 新宿ファーストウェスト 9F https://www.c-nexco-het.jp/	03-5339-1711 03-5339-1719
(株) 西村建設	861-4703	熊本県下益城郡砥用町大字畝野 2900	0964-48-0208 0964-48-0513
(株) ニチノー緑化	103-0001	東京都中央区日本橋小伝馬町 14-4 岡谷ビルディング 6F http://www.nichino-ryokka.co.jp	03-3808-2281 03-3808-2360
(株) 日さく	330-0854	埼玉県さいたま市大宮区桜木町四丁目 199-3 https://www.nissaku.co.jp/	048-644-3911 048-644-3958
日新産業 (株)	501-6002	岐阜県羽島郡岐南町三宅 3-224 http://www.nisshin-sangyo.com	058-247-7529 058-247-7359
日特建設 (株)	103-0004	東京都中央区東日本橋 3-10-6 平和東日本橋ビル 6F http://www.nittoc.co.jp/	03-5645-5050 03-5645-5051
日本乾溜工業 (株)	812-0054	福岡県福岡市東区馬出 1-11-11 http://www.kanryu.co.jp/	092-632-1003 092-632-1023

賛 助 会 員

団 体 名	〒	所 在 地 URL	TEL
			FAX
日本基礎技術（株）	151-0072	東京都渋谷区幡ヶ谷 1-1-12NKG 東京ビル http://www.jafec.co.jp/	03-5365-2500 03-5365-2521
日本植生（株）	708-8652	岡山県津山市高尾 573-1 http://www.nihon-shokusei.co.jp/	0868-28-0251 0868-28-4410
日本特殊緑化協会	062-0032	北海道札幌市豊平区西岡 2 条 12 丁目 2 番 15 号 http://www.jsra-web.com/	011-584-3016 011-584-3030
日本緑化工協会	125-0042	東京都葛飾区金町 5-35-5-206 http://www.ryokkakou.com/	03-5660-1664
（株）ネクスコ・エンジニアリング 東北	980-0013	宮城県仙台市青葉区花京院 2-1-65 花京院プラザ 13F http://www.e-nexco-engito.co.jp/	022-713-7291 022-721-1259
（株）ネクスコ東日本エンジニア リング	116-0014	東京都荒川区東日暮里 5-7-18 コスモパークビル 3F http://www.e-nexco-engi.co.jp	03-3805-7911 03-3805-7902
法面プロテクト（株）	520-0232	滋賀県大津市真野 6-14-11 http://www.norimen-protect.com/	077-571-3521 077-571-3522
（株）フジタ技術センター	243-0125	神奈川県厚木市小野 2025-1 https://www.fujita.co.jp/	046-250-7095 046-250-7139
富士見工業（株）	422-8026	静岡県静岡市駿河区富士見台 1 丁目 21 番 22 号	054-283-2933 054-283-2969
紅大貿易（株）	101-0048	東京都千代田区神田司町 2-8-3 第 25 中央ビル http://www.benidai.co.jp/	03-3256-0551 03-3254-7126
（一社）北海道造園緑化建設業協会	060-0051	北海道札幌市中央区南一条東 1 丁目 2 番地 1 太平洋興発ビル 2 階 http://www.hokuzoukyou.or.jp/	011-221-4451 011-232-5611
前田工織（株）	105-0011	東京都港区芝公園 2-4-1 芝パークビル A 館 12F http://www.maedakosen.jp/	03-6402-3944 03-6402-3945
（株）マキノグリーン	742-0031	山口県柳井市南町 7-2-6 http://www.makino-green.com/	0820-23-4082
山形開発工業（株）	596-0805	大阪府岸和田市田治米町 75 http://www.ymgt.co.jp	072-441-3602 072-441-3838
雪印種苗（株）	261-0002	千葉県千葉市美浜区新港 7-1 http://www.snowseed.co.jp/	043-241-7732 043-238-1383
ライト工業（株）	102-8236	東京都千代田区九段北 4-2-35 http://www.raito.co.jp/	03-3265-2551 03-3265-0879
（株）緑生研究所	182-0026	東京都調布市小島町 2-40-10 桐生ビル 2F http://www.ryokusei-ri.co.jp	0424-99-7211 0424-87-4334
ロンタイ（株）	570-0011	大阪府守口市金田町 3-1-11 http://www.rontai.co.jp	06-6902-9401 06-6905-9070

編集後記

原稿をお寄せいただいた皆様、ありがとうございます。会員同士のフランクな情報交換の場を目指してスタートしましたが、想定以上の原稿の仕上がりには驚きの声もいただいています。学会誌に掲載してよいのでは？と思ってしまう原稿が今号にもありそうですが・・・当初の位置づけは変わっていませんので、どうか気楽に執筆いただけると幸いです。

個人的には、次号は座談会を掲載したいと思っています。〇〇芸人のまねのようですが、緑化技術者が語るこんな法面はいやだ、のような話を聞いてみたいです。緑化の現場や研究の裏側にも、緑の魅力が隠されているように思いますので、普段はあまり語られないところに光をあててみたいです。

4月は大学教員の私にとってはなんとも言えない季節です。ようやく卒業研究が終わって、無事に卒業してくれると、ホッとする気持ちもありますが、植物の名前、調査や解析の方法をようやく覚えて、これから面白い研究ができそうなのに・・・とやるせない気持ちにもなります。そして、新4年生の卒業研究が一から始まってゆきます。表紙の写真の解説に倉本先生が同じようなことを書かれていますが、緑に対して身につけたスキルや思いを、いつかどこかで発揮してほしいと思う今日この頃です。

次号以降も、会員の皆様のご協力をお願いいたします。

(岡 浩平, k.oka.gw@cc.it-hiroshima.ac.jp)

複写される方へ

日本緑化工学会では、複写複製、転載複製及びAI利用に係る著作権を一般社団法人学術著作権協会に委託しています。当該利用をご希望の方は、(社)学術著作権協会 (<https://www.jaacc.org/>) が提供している許諾システムを通じてご申請下さい。

日本緑化工学会 コミュニティレター Community Letter of the Japanese Society of Revegetation Technology

第2号 (No.2)

令和7年4月30日 発行 (April 2025)

編集兼発行人 岡 浩平

発行所 日本緑化工学会

〒113-0001 東京都文京区白山 1-13-7

Tel. 03-3818-8281 Fax. 03-3818-8282

事務局：E-mail: office@jsrt.jp
